

こも相成候歟右等之邊御承知の不被爲在候哉彼家こ而は專支度有之尙
又心得方も仕度こ付何卒御内こ相伺吳候様薩摩守の内こ相頼申聞候こ
付乍序相伺候貴報奉希候

一、松前蝦夷地等之儀こ付過日縷こ被仰下拜承仕候其後種こ探索仕候得
共事情相分り候事も無之薩州等へも承合候得共是亦相分り候事も無之
候何分先般被仰出公邊御取締りこ相成候儀は御尤と奉存候且有志之者
蝦夷地の罷越開業候様被仰出是亦御尤こ奉存候得共追こ好事之者寄集
候而後害を生し候儀出來候半も難計且箱館港之儀も風説こ而承り候得
は諸夷幅湊買賣交易之趣至微品も銀錢等こ而高價に相求専ら愚民を懷
候手段こも有之候哉何分利を以相誘浸潤遠謀こも可有之哉段こと邪教
傳染等も難計儀何分右松前蝦夷箱館等之處こハ耽と御取締り出來候程
の總裁之仁御差置こ不相成候而は唯小吏のミてハ小利こ被誘候ハ勿論
こ而吳こも後患無覺東御大事之儀かと思考仕候且下田へも商船來泊之

旨風説承り申候將又都下も平に追こ復常之趣こ御坐候其後も反復潜思
仕候得共先達而陳告及御相談候拙策之外良策も無之候右等之邊尙亦尊
考垂教奉伏希候以上

右被仰進候處御即報の來候事

一、十二月十三日水老公の御返書左之通

如垂諭嚴寒御起居佳勝大賀候仰名産雪魚獻餘之由こ而忝令嘉納候危物
報好意候也

十二月十

三日脱カ

二、白時氣御厭專一こ候居宅修覆も不行届候得共去る九日假こ引移皆無
事こ候御降心可給候不
御副書こて過日之御書之事云こ被仰越候得共今以何の香氣もさらに拙
老へは及不申右故模様も何も不相分候故有躰申進候
一、蝦夷之儀松前奉行先年さへ御立こ相成候への先ッ松前奉行こても早

く御立ニ相成候への可然よし追々申候得共何等之答も無之當節の如先
年賄賂を取て松へ力を用候儀閣杯ニ有之間敷候得共是亦如此世態と
存候

一、來正月ヘルリ相越候よし御申聞有之候へとも未承知不仕候御備向御
手厚ニ相成候迄の兎角事出來不申様夫のミ相祈申候乍然くれば騒き不
來のゆるミいつ武備御手厚に可相成哉今以梵鐘之事も引上ニ不相成由
此世態ニ而の山門杯ニて少々ひぢを張候得は内々に賄賂先々おだやかに
杯申事ニて止ニ不相成はよろしくと被察心配いたし候右鐘之地銅有之
候てさへ窮迫之大名大小炮製候の不容易まして地銅杯買上ニ相成候の
尙以武備は出來申間敷候歟 御覽後直に御火中
又曰敵家潰等致候所も不少候得共燒失も不致なまじの残り候故やのり
如本ニ可相成模様左候への只々地震だけ入費有之迄と相成り申候燒失
も致候の、何分小く出來候て後々の爲にの可然候處實ニつまらぬ事に

薩侯ト書通
往復

成行申候世上一体も同斷らしく相見申候くれくれも此後は凶作洪水等
か又は夷船云々無之候へはよろしくと存候如何にも人氣改候事無之候
一、去月來薩侯と御應答之御次第ニ付情思召めくらせ給ふに福山侯の素々之
御近親に被爲渡且年來御入魂之御事なれの此御方よりの何御事も御覆藏を
く仰せ談せらるゝに彼御方にての此御方への一トわたりの御返答にて傍邊
ある薩侯をもて御諷諭あり又薩侯も御同志なるよしにの坐セと内々に交易
の説を御信用ありて福山侯杯へ左袒し給へる也彼といひ是といひ不審敷事脱カに
思召せは前記之如く彼邸へ御入ありて御面談あるへしと被仰入たるに夫
の御斷りにて此御方へ十一日に御出あるへしとの御事なりしかと十一日
の此御方に御障ありて御斷りになりにつれと兎角今一應薩侯迄御意衷を
御打明け仰せ入れ置れ其上にて御對顔ありて彼侯の御意中をも御討論あ
るへしとの御心構にて十二月十三日薩侯へ被進し御内書左のことし
過日之密牘忝奉謹讀候嚴寒之節候處愈御勝常奉壽候陳は先日御狂駕に

て御内話被下候折御約束ニ付後日建議書取寫し指上候處御熟覽御同意
に候得共諸大名參暇之條其他委縷之高論且折角御爲申上候而も不都
合相成候而は微忠も無に可相成候間當世可被行程之良法申上候の忠
節も相貫き可然哉勘辨之上取直し差出候方可宜と品々被加賢慮被仰下
一々拜誦不容易御配意不相替御懇情萬々奉感荷候如垂論申過しニ相成
候儀の畢竟右書面辰へ見セ候事故例之親戚邊少も不避嫌忌存付有之儘
相認差越都合により佐倉へも差出可申哉辰へ及相談候處少々認替差越
可然との事ニ付則其趣にて尤廉立建白之心得とも無之兼而之懇意邊ニ
而内々及陳告候儀之處懇諭ニ而心付候への書面如何とも過當之文体不
少不念之至今更慚愧之至御坐候兎も角も天下之御爲ノ第一之儀故當節
御採用とも可相成筋何分とも認替可差出は勿論之儀ニ付種々愚慮を盡
し候得共元來野人之献芹精誠存詰候事故此上可相改趣意更ニ不能愚慮
左候とて御爲とも不相成候儀を其儘ニ而差置候儀は不本意之至甚致當

惑罷在候教諭も相願度且過日面話其上書面等ニ而御承知ニは候得共鄙
衷尙亦左ニ吐露及御相談候

一、當節専ら必戰必死を致主張候は從是和を破り好而兵端を開候意味ニ
は曾而無之候得共近年夷狄覬覦之念相萌候後天災地妖引續既ニ

慎廟の御末年ニ至り墨夷浦賀港内迄も乘入紛紜之間

御當代ニ被爲替爾來諸夷愈隙を窺天災も亦

帝闕之炎上を始諸國之烈震洪波等類ニ而終ニ今般之大變都下ニ相迫候
如斯折合候も必偶然ニ有之間敷恐怖之至深考候得は豐太閤之朝鮮を
征する彼レ荏苒として終ニ懲忿錄之戒を萬代ニ殘し候例も有之當時追
々萬國輻湊之勢に付而は素々彼之遠謀貪心不可計假令從是ハ平穩之御
取扱有之候而も彼々如何成巨害を生し候様の儀も可有之歟と實ニ戰兢
之至ニ御坐候尤品海御臺場を始夫々御備豫は有之候得共銘々之覺悟ニ
おいてハ如何可有之哉万一今般之烈震之如く彼々不虞之變を生し候ハ

自家ニ体察必可及狼狽と寢食不安心御坐候依之近ク相警候得は兩山
火防等之如クにて火事ハ不相好ハ勿論ニ候得共被仰付候即夜ハ必出火
用意は致置候必竟蠻夷之常情難計事ニ候得は器械之備不備ハ不論如何
成不虞の變相發候而も今日は今日丈け銘々必戰必死之覺悟相定置候儀
當世之急務事理ニ於て至當之事と存候右急務ニ付而も如尊旨此節之貧
諸侯富國ニあらされハ強兵にも至リ難キ儀共御密策之趣御同意ニは候
得共當世能人情を以深致觀察候得は一昨夏亞船突然渡來之節ハ衆人恐
怖不大方戰爭之用意ニ及候事ニ候處昨春再渡後は敢而驚駭ニ不及勢ニ
候得は若

廟堂之御趣意富國を先にし必戰を後ニするの御意味に相成候而ハ自然
世俗之情愈戰爭は無之事ニ相心得依舊因循怠惰ニ陥リ可申左候而は富
ニ隨ヒ倫安之念は增長致し器械も備はりかたく強兵ニ至リ候期ハ無覺
束尙戰期を御延し被成候御權道ニ而此上

御國体を被枉御平穩之御取扱而已ニ相成候ハ有志之向も追々解躰彼
レ愈不備を窺ヒ不道之爭端を開キ又は海賊侵掠等之變も難計假令平穩
ニ候とも馴致之弊より邪教臭風推移リ候様之儀も可有之歟彼是御威
光も致陵夷候様之御運ヒニ相成候而は本邦之命令も今日之如クにハ
有之間敷哉と深案しニ候得共甚恐懼仕候事ニ候元來強兵ハ富國ニ出
候事トハ乍申當今實ニ夷狄之屈辱を耻四民心力を合セ
神洲を保護するの勢ニ趨キ候ハ自然器械も相備リ必強兵ニも至リ可
申何分不可測之夷情銘々今日は今日丈ケ必戰必死之覺悟を相極若不虞
之變有之候節は勝敗は天ニ任せ身命を擲鴻恩を可奉報ハ勿論幸ニ戰期
一年相延候得は一年丈ケ之器械も相備へ無怠慢心力を盡し不數年して
進撃征討之勢に相成候ハ

御國體凜然

御當家之鴻業も彌萬々歳と奉仰望候事ニ御坐候右ニ付而は今日必戰必

死之覺悟第一ニ有之則必戰之儀は兼而水老公辰も同意之事故此節柄小生杯々突然致主張候ハ、老公辰等の一助ニも可相成歟左候得は天下之幸甚と一途ニ存込候事ニ御坐候處追々懇諭之趣ニ而は存外之次第ニ而御爲メと存詰候儀却而御爲ニ難相成候而は實以恐縮之至御坐候尤此上私論を張候存意は聊無之如何様ニ成とも當世御爲筋ニ可相成義精誠思慮工夫相盡し候得共素々前文之志願ニ有之且過日之書面は都而參暇之一條々出候事ニ候得は右之條相改候ニ付而は躰驗之趣意相立兼左候而は一通り書面而已相改取繕指出候共更ニ御益ニも相成間敷殆當惑罷在候就而は方今適當御爲ニ可相成筋御見込之處今一應深く相伺候上尙又愚慮相加如何様にも御爲ニ相成候様仕度篤及御相談候間前文之次第御参考昭亮垂教奉伏希候不備

十二月十三日

再伸雪後近日殊更嚴寒御假住中別而御加養專祈本文之趣書中ニ難盡候

間乍御邪魔近々推參尙又意中吐露御相談預高諭度候間書面御熟覽御考置被下候様希申候十一日後は罷出候而も格別御指支も無之哉ニ被仰下候得は來ル十五六日頃彌御指支も無之候ハ、致參上度否貴答被仰下候様致度候以上

右被仰進候處御返報彼方様々可被仰進旨ニ

一、十二月十五日薩州様々御返書左之通

一昨日は尊書辱致拜見候愈御安康奉賀候然は細事被仰下且明十六日御光駕可被下段致承知候甚手狭ニ而恐入候得共晝過御光駕奉願候委御拜眉萬々可申上候其余事も明日可申上候取込ミ早々申上候頓首

十二月十五日

猶々御自愛專一奉存候明日之儀別段不申上候吳々龜末之儀ニ可有之其段兼而申上置候以上

右ニ付愈明日九時御出殿ニ而可被爲入御膳御斷被成候段御直書被遣候事

一、十二月十六日午刻御供揃にて薩州侯之御假住居麻布澁谷之別邸へ御入有御對顔之上無程御閑談之御席となりて公先日來御周旋の御挨拶被爲在其上にて仰けるの此程申入候ひし紙上之趣意も御汲取被下候にや彼書中に盡兼候事共の今日追々吐露に及び御見込之程も伺度候への猶又御垂諭相願度と御申述將當時 廟堂之形勢阿閣の心腹は如何御見拔候やと問はせ給ふに候御答ありし御書面之趣も御尤之事共に拜承候へされと此比十二月爲伺 御機嫌登 營之節阿閣へ對談致し候ひしに何分理屈クサキ事を聞くのいやなる様子にて何方よりも何とも言はざる方か宜敷按梅に被察候ひき其節阿閣の咄に天下を人の一身に比候への骨肉の差別ある如く肉の深疵にても再び癒合候得とも骨を碎き候ては取返しなかりかたし大名の參暇などの骨の尤大なるもの故中々動かすへき事ならずといへる故外夷の交通條約の骨子への無之哉と難問せしに阿の答に是は骨にあらず肉に當れり異國通信之義の

東照宮御代にの類に有之義にて則編年集成にも南蠻船八十餘艘長崎へ渡來 神君御喜悅不斜とこれあり 御三代に至つて御禁絶ありしは葡萄牙人の妖教を日本へ相傳せしより御停止となりし事候への通信商儀の敢而神慮にも相背け申間敷との事候へは此節先き行き致兼候事を強而及主張候への唯理屈家とありて何の所詮もかく候への拙者式も第二等之所置を申立器械にても整度と存候迄の事ニ而候尤第一等の事も國評に及候事も候へとは口外不致事故御咄にの及び兼候との御事なれの 公さらの廟謨の如何之結局ならん阿閣初も定見ある事にやと問はせ給ふに候どふも分別はあきあるへしと笑はせ給ひて兎角理屈を申もの片付置意味にて此比も鍋島出府して長崎御用にて於營中阿閣へ逢對申入たりしか勢州の定而肥前がエライ事をいふならんと甚懸念なりし肥前の勢案に相違して平穩の應對ある故勢州咄の次手に此節の御所置ニ付被心付候義もこれなきやと尋ねたりしに肥前の答に近來之御所置一々無間然奉感服候儀共

にて如何にも此外に被成方もこれあるましくと挨拶に及ひしかの阿闍大に歡ひ肥前のさすがに事馴れたり能く時勢を會したりと同僚へも吹聴ありしと承れり如此様子故當り障りの事は聞くを厭ふ有様なり此節拙者も肥前へ申聞候は貴兄に不似合の挨拶振なり如何の故と詰問せしに肥前のいへるは盛世なれの斯る御所置あるへくもあらず今となりて彼是議するは至愚といふへし 公邊に悪くまれぬやうこそ肝要なれ夫よりの自國を持固め候事當時せめての御奉公と存せし故かくは申述たるなりと申候ひき公必戰必死を今日に覺悟すべく且參暇之條等の如何御考量候哉候此等之條々の親藩の貴兄すら彼是にらみ付候事況や國持外様の面々にては假初にも申出されぬ事にて直に嫌疑を受候の必然の事尤必しも甚御同意參暇之義も勿論無間然候へとも前條の次第なれの申出候とて行はるへき勢ならず且參暇之事の別而拙者抔兎角自國へ引籠らんかとの睨視これある故曾て口外おしかたし拙者に取ても一ト道中一萬餘金の入費候への參

暇間遠となれの格別の有益にて願は敷事にて肥前なども同然あるへく其他大小遠近共にそれの有餘出來すへき良策候へとも右等之意味決而主張に及び難しと申させ給ふ 公又右等之兩條を措て當世に行はるへき良法あるへき歟又富強の術いつれより手を下し候半哉と問はせ給ふに候阿闍の語氣も人身に喩へ參暇の御大法の骨子なれの適ふへくもあらず富強とても必然の術計何處にかあるへきされはとて當り障りある事はいよ／＼行はれ難き勢あるの責めては諸侯を初當前窮迫之向へ御手當あらは微益なるへしと申試候へと夫さへも先き行せねの如何ともすへき様の候はすと申給ふ 公如何にも詮方なき次第共に候か先きにもいひ給へる第一等の御國評とは如何成筋候哉別段の御入魂あるの御密議なりとも承り度と仰せければ候御他泄は御無用たるへしとの御口留にて御申ありけるは今後の見込の定め兼候へと世跡追々衰弱に及ふより外のあるましく夫に付ても第一當時清國の亂にて官兵大に破れ無程明奇に被取潰可申趣近

來琉球が申通候とて則唐刻の支那沿革圖を御小屏風に被成置候を御指示しあるを御覽ありしに詳細精密の地圖にて北京領は残り少し南北へ通路を斷切り敵方々の砦を夥敷築きて北京を圍ミたる形勢なり候御申ありしに如此次第候への不遠して英佛も打混し三分とか何かといへる事に相成へし左候時は日本は愈孤島獨立とありて頗危難の勢あれの機に乘し譬へは中國大名の新和蘭陀九州大名の咬啗吧印度邊陸羽諸侯の山丹滿州杯掠奪すといへる如き大奮發大英斷を以手を弘め兵威を引立度との事に候ひしかと中々當今口を開くへき時にあらずとの御咄あれの公夫は參暇よりも目の覺たる儀候への御主張ありての如何と仰せけれの候此節かゝる大議を唱候儀の親藩の貴家杯からての一ツ二ツ敲きて濟可申儀を外藩の我々式にての五ツも敲かれ可申先年水老公さへもあの通りにて候ひき近來無據時勢につれて少しツ、心持のこれあり候得へとケ様なる儀の更に先キ行き難致無益之儀なれの當時相應の良法と存候義を申立る外は候は

すと御申ゆへ右様進撃の大議の行はれ難く候への其進撃すへき道行を唯今より心懸相定置度との拙策にて候か道行なくての其他にの及ひ兼候事歟と仰するに其通りに候へと其道行さへも行はれかたきにの殆當惑故不得止事器械の備へ自國の警衛位事心懸より外の候のすと答へ給ふ、公又問はせ給ふは來春亞墨利加船渡來して測量の事申立なり御答の可否如何あるへき候先日も球地の義に付水筑に逢ひ内々探り見候ひしか筑後の是非「コンシユル」の事と測量の斷り切と申せし故戰爭になりても英斷爰に極り居候哉と承りしに其節の其節に應したる御評議も工夫もあるへしと申候ひき左すれの愈「コンシユル」も測量も亦御免に可相成と推量られ候公然らは先此の發令の全く無益虛妄に歸し可申其處の如何あるへき候又一時の御權道とか申事にあるへし已に昨夏布廷恬下田へ渡來之節も強而登城之義を申立なり忽ち御許容にも可相成勢ありき其譯は勢州牧備等皆々其節の應接の用に華麗成官服を京都へ誂らへて織らせたるか夏比出來し

て此表へ廻りたる由を承りて候き 公又條約を始夷虜に被壓候情狀營の醜女の戀慕して迫りて男子を推し倒すに至れとも其儘になりて手出しもせず十分畏服の姿にて候畢竟右様屈辱を受候ても腰刀を抜んともせざるの及さびて切れさるか此時に當りて抜かすんは帶せずして可然腰刀を帶したる丈夫の婦女子の手ごめに逢ふ如き形勢に候はすや候如何にも貴諭のとし誠にふかいなき男子にて大息の外なし 公水老公は兼而御咄ニ及ふ如く參謀の名のミにて案山子同様との御事よての如何にも氣之毒の事に候はすやイツ御引入も然るへからんか候如何にも案山子看板には候へともまたも御立物に水老有之故老公へ對せられ當時程の事もあるなるへし萬一老公御引等になり候半にの埒もなき事にもあるへけれの案山子なりとも御登城ある方増り可申歟 公過日之書面阿闍へ御示し御相談被下候半にの今少し和らけて認直したる方もよろしからんかと問はせ給ふに侯夫にも及ひ候ましあのみにて阿へ相廻し相談に及ひ候へし前よも

申せし如き淵底への返答の如何ならん難量候へと何にもせよ今一度懸合試候半との御事なりしとそ其餘種々の御閑語畢而頓て北の方へ初而御對面あり是の一橋公の御女にて公の御實方の従父姉妹に坐したり夫々御養女之御方へも御對顔あり是の薩侯御姉君の御腹御一門島津某の女にて實の御姪なり此御方は

廣大院尼公御在世中御身近之御方御縁に被爲成候様との御遺言に依て此度

將軍家の御臺所にも被爲成んかとの御沙汰ある御方なり丈高く能く肥へ給へる御方に坐したりとて是より種々の御饗應あつて初更の比常盤橋の邸へ御歸殿ありき

師實私云薩侯英邁の資を以御領國を統御し給へとも執政島津豊後の薩の老公殊寵の權臣なる故老公に據て逆威を振ひ朋黨を立薩侯の富強經綸の政治に馴致せずして閩藩合一ならず侯權臣を壓倒し給への事老公

へ波及して御父子の間隔を生ずる勢あり候深く是を憂ひ給ひ不得止候
の威を幕府に借つて士庶を鎮定し給へり然る折柄なる故廣大院尼公の
御遺言旁此御養女を御臺所に居る参らせ竊に外戚の權を占て隨意に政
教を施行し給はんとの御遠謀にて深く福山侯に結んで親戚に等しき約
をなし給ひ今年も御滯府あつて種々に御心に碎かれ此比とありて其
事漸く成るに垂たり此事に付ては
公も松榮院尼公水府老公并福山侯の御手許を御周旋あらせられし御事
ありき

一十二月廿四日薩州侯より被進たる御内書如左
寒氣之節御坐候處愈御清榮奉賀壽候然は別紙之通り返答申越候間差上
申候尊書之趣に而承伏と存候以後之處當世の良策御勘考專一と奉存候
前文之通故先拜眉に不及と奉存候來春拜顔萬々可申上候佛炮返し參候
は、早々差上可申候來書御覽濟御返却可被下候頓首

十二月廿四日

猶々御自愛專一奉存候以上

一勢州様御上書薩州様御上書之御密翰左之通

薩摩守様

内用事

伊勢守

内密被仰下候華翰拜讀仕候如仰寒氣強候得共倍御清榮賀上候陳は此程
は南部遠江守結構被

仰付誠以芽出度儀御同然安心仕候右に付遠江守の勿論家來共迄も仰天
いたし候程之由嘸と察入申候右に付段々御挨拶被仰下何寄之品被下厚
難有存候且又越前守を申上候書面内密爲御見得と致一覽候處同人申聞
候處隨分尤之儀に候得共逆も参り不申さへ一兩年以前迄はまたも此
理屈之處も有之候得共富國を先いたし必戰を後にすると申儀は可耻
儀と申せの申す様之ものに候得共時勢之變革武備之強弱國之貧富も
少しは考慮も無之候而は只からりきみに相成事實の参り申聞敷か御同

然之國と江戸ものゝ家來ニ而も海防の議論ニは強弱有之國ニ而理屈を申候ハ先ツ越前守申聞候如くの説多く江戸ニ而得と異國の情態を勘弁いたし候ものゝ説ハ又左様計りニも無之有志之ものに而も一昨年昨年と當年段々勤考ニ而種々説之變し候儀も有之まして海防筋之儀外國之事情種々様々の事朝夕取扱居候身分に而ハ中々當今容易之事ハ出來不申去レハとて武備迄捨ると申義ニハ無之武備ハ益盛強ニいたし度候へとも取扱方ハ時勢を勘弁無之而ハ眞の御爲とは不被申様被考申候乍併最早先日之書面ハ備中殿へも出し有之儀故只今此處あの處と引替候ニハ不及と存候間左様思召被仰遣置可被下候書面にも老公小生ハ一戰と覺悟いたし居候間越前守ケ様建白致し候ハ、助ケとも可相成哉と申儀是ハ同人之存込は左ニも可有之候へ其中々右を以て評議之一助と申譯ニも參り兼水老公ハ程能越前守へも被仰置候事故同人も實ニ左様存込居候事ニ可有之歟貴所様も餘り色々被仰遣候ても却而御面倒ニ可

相成候間此度の最早差出候事故御引直しニハ及不申以後ハ能々御勤考被仰上候方可然位に被仰遣置候方可然哉に存候間厚御熟慮宜様被仰遣可被成下候同人別紙返上無伏藏申上候御覽後御火中可被成下候頓首

十二月十九日

二白時氣折角御厭專一存候

一、先日之炮越前肥前等へも爲御見被成度趣委細承知いたし候近日御戻し可申上候以上

一、十二月廿五日薩州様へ御内書左之通

昨日は貴簡拜讀仕候如仰寒氣之節ニ御坐候處愈御安寧珍重奉存候然ハ阿闍御返答御廻し被下儘ニ落手再三披見仕候阿闍心体も詳悉仕候段々不容易御手数數ニ相成御周旋被下候段誠ニ難有奉叩謝候如命先拜眉不及來春拜顔ニ而萬縷可申上候扱又阿闍之返書返上仕候御落手可被下候

一、佛炮阿闍返却次第御廻可被下旨忝奉存候

一、騎兵書今夕家來々庄太郎迄返上仕候筈ニ御坐候左様御承知可被下候
右昨日之貴答御禮旁如此御坐候頓首

十二月廿五日

二白御端書忝尙又御自愛奉專念候以上

昨夢紀事第三卷終

昨夢紀事第四卷

安政三年丙辰正月歲月流るゝか如く曆の端は改りぬれとも改るへき世態
にもあらず 公去年來御憂勞ありて御建白の事ハ佐倉侯よりハ何等の御
答もなく却而福山侯よりハ薩州侯迄被仰入れし御次第ともありて事行る
へき様もなく且此月の八日の日より佐倉侯御登城なくて日數經ぬれハ世
の間にては彼是おもひいふ事ありて何とやらん穩かならず公も大船の楫
を絶えたる如く思ひ屈し給ひて天下の事爲すへからさる勢となりたる
も約る所ハ上に屹然たる 主宰坐さすして萬機閣老の手より出るを以上
危踏ミ下疑ふ有様あれハ何事も指置て例の西城の件こそいよハ肝要な
からめとおほせともこれは猶更果敢行くへきからねハまつ此比の廟堂の
事情いかなるにやと正月十八日水老公へ御尋問の御内書如左

水老公へハ
質問書

一簡謹啓仕候兎角春寒退兼候處倍御安泰奉恭賀候此節御障りも不被爲
在候哉相伺度奉存候此蕎麥輕乏候得共信州へ到來并例之國産雲丹不腆
之至御坐候得共右御近況相伺候驗迄拜呈仕候御笑捨可被下候尙書外は
讓別書早々如此御坐候恐惶謹言

正月十八日

二白時下春寒折角御厭御自重爲天下奉懸念候

松榮院去ル十四日神田橋御住居に御歸輿相濟降心仕候乍序御吹聽申上
候頓首

一、御別啓左之通

一、當今御時態云々ニ付舊冬も依垂問愚衷書附差出其節も懇諭之趣奉厚
謝候儀ニ御坐候櫻閣に指出候後今日ニ至而未何等之返答も無之從阿閣
も右邊ニ付別段申越候條も無之候世上之様子見聞觀察仕候得は風俗彌
萎弱の体ニ而綱紀之不振は勿論從

公邊舊冬來折々被仰出も有之候得共只今日之細事而已ニ而格別には迄
神州之士氣振起衰季挽回程之御處置も無之就而は姑息陵夷の外無之次
等ニ御坐候然ル處兼而薩州は阿閣に格別懇志付毎時内密申談之手續を
種々申越薩州も同意ニ而不外周旋彼方の往復何卒御爲可然筋をと精誠
愚慮を悉候得共阿閣追々返答振舊臘結末之返書之趣ニ而は反復申陳候
素願之條且又拙策は勿論ニ候得共右様之筋は迎も取用は無之却而理屈
張候僻論學者風之議論ニ而當今不合と被取成右等の趣は迎も幾度申立
候而も無甲斐趣且當時因循之方ならては相談は難出來趣ニ而忌諱に觸
れ避除せられ候の兎も角も右之次第ニ而は當時骨子と依頼之阿閣之淵
底も篤と相知レ候上は最早何方の手を入候工夫も無之殆途方ニくれ實
ニ望洋之外無之候第一

公邊之御爲如何可相成もの歎去レハとて沈黙仕居在甚如斯
御時態にて苟且因循何一ツ御武備之振興も不相伺當春も亞船渡來之不

容易風聞も有之若今日も來舶此上彌増之御屈辱且は萬一御武備之不
整方巨患を引出し等之儀等有之候而は實に不堪憤懣次第無左候共彌輕
蔑之狀等有之候而は傍觀は難仕居次第彼是思惟仕候得は誠ニ不安次第
故舊冬も申陳候儀ニ候得共今更ニ櫻阿之兩閣依頼も無詮吳も望洋不
知所措仕合ニ御坐候

尊公ニも案山子云々之高論毎々拜承之別而御參謀之御儀故御苦心之程
萬々奉恭察候就而當時は又御工夫も可被爲在哉ニ奉存候追々之成行も
如何被思召候哉極密相心得も仕度奉存候且高論之次第ニ而周旋仕可
然筋も御坐候ハ、如何様ニも心配可仕何分唯々

公邊御爲筋相成候様仕度外無之候又當今ハ兎も角も黙止可罷在時勢と
御見込も候ハ、高示に任セ只管自家之備のミ嚴重ニ相守リ彌研究も仕
度右等之邊御見詰如何被爲在候哉何分御垂教將又其他心得ニも相成候
儀御坐候ハ、被仰下候様奉伏希候右は乍例前書之次第實に當惑之餘り

極密相伺且御相談も申上候吳も偏ニ高示奉希候謹言百拜

正月十八日

水老公ヨリ
返答書

一、正月廿一日水老公ヨリ御返書并御密啓左之通

如論春寒退兼候處御起居萬福拵賀々候御尋問佳品御投惠忝存候領海
之微魚報好意候也

正月念一

二白御端書之趣忝存候時氣不順に候得は御自愛專一ニ存候扱又 松榮
夫人ニ而も去ル十四日神田橋 御住居ハ御歸與相濟候よし御安心の義
と存候右等ニ付而も色々御心配有之候御儀と御察申候不一

御別紙ニ而内密綴々御申聞之義何も御尤ニ存候近頃之地震杯ハよき御
改所ニ候得共如何様申候てもやハり因循云々是が則時と申ニて如何と
も可致様無之拙老事ハ乍案山子も時々登城いたし候事故十ニ一ツも建
白も御用ニ可相成哉と時々申候へ共御取用無之上ハ貴兄杯ハ御建白ハ

尙更と被存候扱又因循之事申候の、御取上にも可相成哉候得共夫の申人多候への申への不及義勿論左候への閉口致居候て時を待候外無之かと存候事なき中へ御手當等厚く相成候の、何時事出来候ても御安心に可有之候へ其夷狄來れの騒立歸り候への又わすれ候様にていつとも御手當の出来申間敷昨年貴兄を御指出しに相成候御書付も今以拙老への何之咄も無之候薩州も御同意云々毎度薩州肥前遠州杯御同論之義の拙老も承知何レも頼母敷人候乍然前文にも申候如く案山子之拙老申候てさへ不被用位故案山子迄にも無之人々の建白の尙々可有之哉と存候への當今のやりの黙々の方も可然歎其知可及其愚不可及之處かと存候あまり強て被仰立御不興等の事にも相成候ての以の外の事と存候時を御まぢの方可然歎雖然自家之義の度々公邊方も備向手厚致候様御世話も有之候事故大名始武器も手厚にいたし彌研究致候義の可然事と存候梵鐘の事杯も今以何御沙汰も無之御調

中との相見え候得共何レ其中への可被仰出歎被仰出候の、早速に大小炮等御出来にていつ何時にても御備御出来に相成候様致度事候萬一御武器云々彌輕蔑之狀有之候ての云々是迄畢竟云々故此姿に成行候事と恐入候又何程器の出来候ても士氣振起不致候ての出来候器も敵方の助勢と可相成程も難計候への何分にも士氣振起いたし候様有之度事に候貴答迄早々

一、薩州肥前へも書翰遣し可申筈之處昨年來爲指用向も無之候に書翰遣候も嫌疑有之候故遣し不申候肥前事の同人娘大和守内室に相成候への直々にも書面を以教示等頼に可申筈之處是以未遣し不申候右兩家へも近々への新年の祝義にても可申遣との存候へ共御逢にも相成候の、尙又よろしく御傳可給候別而肥前守への大和守教示之義よろしく御頼可被下候

一、又極密御咄申候拙家國に居候谷田部藤七郎以前の雲入と申者候と申大姦人連枝

高松等へ喰入居候而色々の姦計をめぐらし申候故召捕可申と存候處此節の國に居り不申由年の五十計にも可相成哉定而國を出ルからの名をも何とか改居候半が若く御聞出しの事も有之候の、居所極く御内へ御知セ可被下候此段御頼置申候御火中

一、正月廿八日御登城あり於營中薩侯へ御對顔ありしに候當時阿闍への松平河内守媚付居て彼か言を採用せらるゝ趣なれは彼河内がかくてあらん程の何につきても目覺敷事へ行はれかたかるへしと思はずよしを御密話ありしとそ河州は當時御勘定奉行にて出頭無比之勢ひなりき

一、二月廿三日今茲四月八日は御先祖

淨光公二百五十回之御遠忌御相當に付御歸國之上御追福之御法會御執行可被遊との 思召に而當春早御暇の義去冬中御願之通被仰出候に付來月中旬に江戸御發駕之思召に付此日御暇乞として福山侯の本郷丸山別邸なる謚姫の御方へ御入あり辰ノ口の本邸の昨冬の烈震によつて御破潰に

阿部閣老ノ
本郷丸山ノ
別邸ニ對談
ス

相成當時御普請中たるよつて勢州侯も此邸に御假住居あつて日々御馬御乗切にて御登城あり素々御別邸と申且福山老侯も御住居故當侯并謚姫の御方之御住居は殊之外御手狭にて御閑談の御席もあらせられぬ計の御事なりとそ其上昨冬來薩州侯と御内談之御次第にて

幕府の御爲筋と思召被入候而も大議論之儀の姑息因循之時勢に適ひ難き故にや兎角の被仰立も御氣障りになるのみにて御公私に付御益はあるまじき御様子なる故今日は 公も態と御持論の御主張の不被仰入一トわたりの御應答にて

淨光公の御贈官并御假御養子之御事其他御私家の御事を御頼みありて御退散なりしとそ

水當公ト營
中ニ談ズ

一、二月廿八日御登城水戸様へ御逢之節御應接之次第御心覺御書付寫し
一、登城之處水戸殿逢對被致度旨以坊主星野久春被申越候に付直に上之御部屋へ罷越水戸殿一應之挨拶時候等畢而敷居内へ進候様被申候に付

罷出候處別義も無之今日登 營運引相成候も只今迄隠居と相談致候
 故也當家之厄難再發何とも焦痛不少尙右等の始末委細賢兄へも無覆藏
 御嘶申上及御相談候様との隠居申付候其譯は兼而御承知も可有
 之家來谷田部雲八只今藤七郎と申者甚敷姦人而先般亡命之上何國
 參候とも難相知候得共多分高松居り可申哉頻々姦策をめぐらし無謂
 妄言申立高松を取入高松も亦格別に聞込ミ周旋被致夫は隠居折々登
 城御政事御相談預り候儀を甚鬱陶敷存再如先年駒込へ押込從
 公邊嚴慎被仰出候様致掛小子も押込加之一橋迄も同様致し度専ら配
 意いたし夫故か隠居之登 營も近來は從
 公邊被仰出候迄先登 城不被爲在候様との事而今御登 城無
 之是全く高松姦計井伊之黠謀も可有之哉と存候程之事而先年小子
 幼弱之砌隠居は駒込へ蟄居高松後見被仰出候砌も實は小子迄を覆没し
 自分水府公企望候惡むへき謀慮も有之候由今度も如前文隠居の再如前

(原頭書)
 讀岐聞えハ
 最早登城先
 之義御申達
 候以前申置
 候夫不申今日
 も途不申候居
 相成候ハ隠居
 被重疊之義と
 申

文仕組度且高松嘶を外承り候ハ我等兄弟早く死去候ハ宜杯申候
 由一体連枝之身分として左様之儀は有間敷當家之爲を謀りハセすとも
 當家之巨害を發候を好み候杯ハ以之外之至是等も當時國許居候姦黨
 之巨魁結城寅壽杯之扇揚も可有之哉且又先日小梅別園へ隠居小子同
 伴罷越其節手持足を引戯れ候事ハ親睦之至候得共矢張夫等高松邊
 一面は睨ミ居候由をも承り候只無謂妄言を申立候ハ殆當惑今日是ハ
 一橋へ罷越右等及相談候尙又所存承度旨
 答委細謹承御即答難仕尙又千思萬慮を加へ候上可申上候得共只水滸
 の重事のミに無之實ハ天下至重之大事にて宇内觀瞻之老公再如先年相
 成候而は一向不相濟候先年之儀は尊公にも御弱齡之事駟馬不及不肖之
 小子候得共忝も御親胃之名候得は如何休も千萬之愚考努力周旋可
 仕當今實ハかゝる巨姦之計策熾盛ハ行ハれ候時候得は賢公御大事ハ
 勿論之義毫も御父子御離間之氣味有之候而一向不相濟多人數之姦黨

論議致蜂起候而も聊も御動搖無之倍以御父子御親和被爲在姦邪ニ御輸負無之正人之御家臣等御親ミ之程能ク御心得有之候様再三申置候
 水府家老武田伊賀初名彦九郎ねも逢對尙又密々及垂訊候處大同小異ニ私共時刻を争ひ今日は御咎明日の如何と實ニ痛胸焦慮罷在候當時は先ッ御父子之間の親睦被致高松ニ當時藤七居候趣於公邊何分正邪分明相成候様願ハ敷事ニ候旨荒増承之

一、薩州へも右之趣極密相咄候處薩被申候ハ先刻例之一件阿闍より内意有之其節阿闍被申候ハ湯川安道伊東宗益之類ハヒハ能廻り候得共一向油斷不相成已ニ水戸老公之事ニ付而も不容易浮言を申觸し彼者杯ハ油斷難致此節水戸之義ニ付大心配と被申右之義承候へは望外之咄に相移り其儀相止申候と被申何分幸にして阿闍咄も有之事故三日登 城阿闍へ逢候故右等之筋委細可承と被申ニ付小子も何分御周旋被下候様奉伏希候阿闍へ安道之事より御聞糺之程約束いたし置御禮後坊主へ承候處

桑山十兵衛
 水府家老
 武田伊賀守
 遺ハス

水戸様今日御居殘伊勢殿備中殿備前殿御逢へ之有由坊主申聞申候

師實私云水府之御家事を記するハ頗贅疣に似たりといへとも老公の御起伏は天下之形勢に關係し將西城の件に波及すれハ公にも事分けて御力を盡され御周旋あらせられし御事故要を摘んで追々掲出セリ

一、二月廿八日今朝於 營中水戸様御密話之趣ニ付尙又當時事情委細御承知被遊度ニ付今夕八半時頃ハ十兵衛儀水藩武田伊賀方へ被指越之委縷之内話承之暮時過罷歸り申上候次第左之通但伊賀守口上之趣を以書綴候ハ伊賀儀御供方罷歸候處ニ而上下之儘對面暮時迄密話之處水

近來 公邊ハ格別之 思召を以老公御優待被下國政向父子相談致候様被仰付候後は賞罰も被行奸人共ハ次第ニ擯廢被致候ニ付憂悶無止時消滅ニ至り難ク候得共戸田某藤田某等厚ク心を用ひ維持致し居父子之間も右兩人始之配意を以追々解疑親睦相成奸人共手を束居候處昨年兩田壓死之時を得忽矢田部等之奸人夥敷金銀を借出し極密出府夫々へ駈廻り申

込水府之政事向老公一己之存意ニ在セ苛察暴政等之趣ニ申立始終恰好能く取繕理を枉て非ニ飾り候事誠に深く存知之者といへとも容易く疑念を生し候様に相認父子之間を離間爲致再老公を押込高松を後見と致し右之者共恣ニ取行ひ無止時之鬱忿甘心致し度内存之趣則右書付中納言殿前へも出申候然ル處高松にも兼々其含蓄有之故右之儀を大ニ信用セラレ且家來ニも同類澤山有之主張致し候趣等公大ニ驚れ愈手元を嚴重ニ被致置候得共いかにも安心難出來ニ付則其砌態と工夫被致自書を以高松へ當時要路邊之者共いやニ相成候間致登用可然人物も有之候ハ内々被申越候様ニと被申越候處彼方ハ實事と相心得大ニ悦ひ直ニ奸人共姓名を被差上候故此儀は別段之存寄有之申越候譯ニ而決而要路之人物を眞ニ嫌候譯ニハ無之候間左様相心得候様申遣候得共彼方ニ而は直様奸人共へ右様當公ニ於て嫌はれ候人物を老公一己之存寄を以強而被用候儀と相觸廻し候ニ付奸人共ニ於て夫をつかみ居彌時を得候趣ニ而

奸謀次第ニ增長致し何分ベリ方出來不申候半ては不相濟と心配致居候内當正月初ニハ矢田部某も歸宅之趣ニ付追々可申付處又々直ニ致出奔兼而之覺悟と相見え宅中の諸書付等一向無之夫ハ親類共へ申付候ニ付其趣如何して承知候かいかニ探索候共いかニ相知レ不申尙又當地ニ於ても八丁堀等へ頼込探索候へとも何様之手蔓を以何レ之處ニ蟄し居候歟今以心當りも無之當節ニ至り候而ハ兼而老公へ遺恨有之人々出家等ニ至る迄彌以種々様々申觸し邸中奥表又ハ市街ニ至る迄今日ハ老公押込明日ハ家老始擯斥有之等色々虚説を申出し人心を動搖爲致其上四五日以前ニハ側向之者貳三人奸連有之此者共當公へ直達ニハ當時要路之者を擯斥被致度候ハ、早々直書を下し國元ニ禁錮罷在候者四五人被召呼對決被申付候ハ、可然等申達し當公大ニ腹立被致右之者共退役被申付度被存趣ニ候得共左候ハ、奸人共彌増憤激致しいかある弊害をも生し可申歟と乍不本意其儘ニ被致置甚心配被致候得共今以確證と申も無之

故當公も取仕切相達候譯には中々參り兼誠ニ手も足も出不申只手前を嚴重ニ固メ居候而已乍去萬一此上ニも何方より之とも大切之筋へ達し出右等之書付を差出候ハ兼々忠邪亮然御辨別ハ勿論ニ候得共餘り上手ニ書綴候處より萬一御疑惑之筋相生し候儀も可有之哉と當公ニ於て晝夜心痛被致居候右等之奸計ニより政事向父子相談不出來様相成候ハ水府即日ハ皆闇ニ相成候ハ眼前之儀ニ付元々右様浮説流言同様之儀御取用ハ有之間敷と安心仕居候得共吳々も理非書紛し候姿且ハ高松の聞込も不容易趣ニ相察當公懸念被致候事之由右之儀萬一御聞捨ニも難相成御運ひニも相成候ハ何卒厚御調へ被下候而是非曲直明白ニ相分り候様只管願ハ敷奉存候

一、三月朔日薩州様へ被進候御内啓并御別紙左之通

然は一昨日之一件ニ付尙又相調候趣別紙ニ爲認入貴覽候御熟覽可被下候過日御内話之通り何レ明後朝辰へ御對話可被成其上ニ而委細可相伺

候得共夫レ迄之御含ニ得貴意置候何分明後朝拜眉萬々委縷申陳御周旋等可希と草々申洩候

御別紙

水府一條一寸御咄有之且中納言殿内話并家來伊賀々承り及候儀ニ付歸宅之上尙又腹心之家來を以極密及探索候處當節事情荒増左の通り

近來

但都而廿八日ニ記候通り

一、三月朔日水老公脱カ被進御内書左之通但中納言様へ之御一封封し込候事

然は一昨日於 營中黃門君へ拜接之節縷々被仰聞御傳言之趣拜承仕御心痛之段奉推察何分乍不及精々配意仕度奉存候右ニ付一封指上度候ニ付乍憚尊公迄指出候可然奉願候表立指上候而も何とか嫌疑等も無覺束候ニ付相願候義御坐候御亮恕可被下候

一、同日水府當公へ被進御密翰左之通

陳は一昨日於 營中拜謁之節被仰聞候條委縷拜承之尙又歸宅之上極密

伊賀方へ腹心家來指出爲相伺候趣罷歸委曲申達逐一承殊更驚入候次第御坐候右ニ付再思慮仕候事ニ御坐候何分乍憚御父子様御間柄愈以御親睦の申迄も無之邪説不被行凜然御動搖無御坐專一之御儀ニ御座候尙又尊君の閣老等への折角被仰合御坐候様奉存候依而は野生も乍不及可成丈々周旋仕度奉存候猶明後日拜眉萬々申上度草々如此御坐候

一、三月二日夕水老公の御返書御密啓御別紙左之通

極密御咄申候結城寅壽藤田清軒此者只今死谷田部藤七郎元は雲八郎等去候て居不申候父子を難問いたし置中納言を欺き申候て有志を打候義の去ル甲辰以來事ニ候處只今にての父子の間もよろしく相成候への此分にての自分の存通り兼候故又々父子を離間致し度と存連枝高松へとり入又姦僧等へ申談し姦僧之義は梵鐘御引上にて拙老をうち居候故右を幸と存して姦人へは付候半此度梵鐘御引上ハ父子一和無之又の政事向拙老のみにて扱候て鐘引上申候への拙老手初候へハ拙老を敵に取候事と被存候暴政抔云々天下中へ相ふれ幕後宮抔迄も手を入候て又々拙老國邦ニ携

り不申様致し可申と高松周旋のよし然ル處此度中納言事高松の申候にかまひ不申父子一和ニ致し候への高松にて奸人と申合せ候様にも相成兼候ニ付ての拙老并中納言一橋迄をも公邊の御咄ニ致し置候て自分にて此方家を奪ひ申度心ニ相成り谷田部藤七郎申所を取用ひ小姓頭横山兵藏是ハ藤七郎出奔之節夜具蒲團等迄捨遣申候小姓大森金八郎是ハ高松の家來にて彼方な主人と致居候様之愚物ニ候根本新八郎是ハ使役にて舊冬國勝手ニ相成申候右同人義國へ下り不申以前ニ拙老を押込申度との趣の由追々承申候中納言話等申合せ高松にて此家を奪申候は誰ニは何役を申付候と申事迄役々割付申候て右書付は中納言にて一覽致し候事有之よし拙老中納言を迄押込又拙老于供多有之候へ全納言内の子有之候得共是以心ニ任セ不申見かけと相違ひ連枝の身分にて何共不相濟事ニ候殊ニ溜詰抔申候ての外ニにて御役人共存居候程の者にて右様の心得にての決して不相濟事ニ御座候何程に此家の軒物共嚴重ニ申付候ても其長たるもの格別不殘死刑ニも致し兼候への高松此まゝにての迎も此家治り候せん無之候への高松義輕く以後溜詰御免

大廣間詰被仰付國替位之事は不相成候而の同人の爲に本家の國の亡び候様可相成候尙同人家來に此方奸物に組し居候て高松へ右様の事すゝめ候者瀧川内膳等三人計有之候處是等も重くの死刑輕くの一代蟄居等も公邊を被仰付候様に無之候ての迎も奸人の根のたえ申間敷候二三日以前に勢州を拙老迄書通有之候處全く奸人の説信用の書に候得共其志の拙考不爲に不相成様と深切之意に候乍然書中の奸人の説を用候義にて返書をも遣し兼候故返書の斷り申候右之通閣老迄も欺れ申候への後宮杯の勿論の事と存候古昔に候へ、高松義呼付論候上にて切腹にても致させ可申程の事候へ共當世態左様にも相成兼候への公邊を高松事後見御免の上にも水戸家奸人へ組し不義之儀を企候義溜詰に不當と被思召候に付溜詰御免以後大廣間被仰付國替被仰付候よし御達にて同人家來三人共死刑輕くの一代蟄居にも相成候へ、可然事と存候本殿を奪候意味出候ての迎も高松之家の六ヶ敷と被存候への後見御免

後も云々申位之處にて被仰付候て可然と存候國替之義も何レを被下候と申事迄御調にての急々の事にての參る間敷候へ共只國替かとのミ被仰出土地の義の追而被仰出候振に候へ、急々にも被仰出にも可相成候良地と違ひ悪しき土地は何レにも可有之と存候一体連枝共の皆々大廣間席に候への同所に相成候迎も表向の左程之儀の無之於内實の同じ拾二萬石にても難義の處の相違と存候への前文之通り溜詰御免所がへ可然事と存候追々仙石其外之義にて見候ても溜詰とも申者右様にての決而不相濟事に御坐候御舍迄に極密御咄申候直に御火中希候不盡

一、此度御臺様の事も被仰出候處近衛殿御養女と相成候よしにて大に安心致し候薩州の近衛殿御家臣筋に候處薩の連枝の家老娘を薩の養女に致し候のミにての倍臣陪カの娘にてあまりいかゞしき様は存候處近衛殿御養女と申名目に候への先々以前の御臺様の有様候への外々への聞へもよろしく將軍家をふみつぶし候にも不相成事と存候右を御臺様

こいたし薩國の奸正をよくく御咄申置候て右 御臺様の御意を本とし奸を退け正に返し候心候の、其處のよろしく候へ共以前琉球交易を濟せ候様又々四夷の交易にても初候やうの腹にての以の外と今より懸念致し候何も極密御咄申候直に御火中く

一、又申候たとへ世評等何程有之候共一二應の當時申付置候役人を老中宅へ呼よくく聞候への是非も分り可申を奸家にて當時の役人の云く故呼候ても無益と申様を申ふらし候半故全く風聞にてのミ存候故甲辰の節も相違の事出来申風聞も實の風聞と奸人にて賄賂を以て頼候て風聞を出させ候との大に相違候處御大政の方もとかくに賄賂行はれ候故油斷の相成兼申候極密く直に御火中く

一、三月三日 公上巳に付御登 城あり於營中水府當公へ御逢對被遊一昨日も御書面もて被仰進たる如く國家災厄之時に當りての猶更御父子の御際に御間隙之出て來ぬやふに御卓立あつて御正義御主張あらせられん事

を仰進められしに専ら御同意のよし御嘉納ありしかと別に彼御方より仰せ談せらる御義は坐さゝりしとぞ

一、右同時薩州侯へ御逢ありしに當日御禮後福山侯へ御對話の由にて公の御出仕中に福山侯の語氣も御承知被成かたき故明後五日彼御方へ入らせられんと御約束にて御退出ありしかと同夕尙又薩侯へ御書を被進五日朝五半時より入らせらるへくと御案内被仰進しに同四日薩侯へ御返書ありて昨朝は御用多の由にて福山侯へ御逢あくて十五日御登 城の節御逢なされんと御事あるよし明五日の御指支なく候への御出あらせらるへき旨を仰せ進せられたれと福山侯の御様子御分りなくての明日入らせられても詮なき御義故此御方よりの入らせられすとも濟候へと彼御方に仰せらるゝ事もあらゝ入らせらるへし又十五日の御逢にては此御方の御發途に迫りぬれば福山侯へ御書ありて其御返書を御一見被成度よしを御再答旁被仰進たり

一、三月四日勢州様御密書左之通

内密用申上候追々春暖相成候得共被爲揃愈御安靜賀上候陳は過日は假住居如何敷不都合而已之場處へ能社御來駕被成下厚難有奉存候與初一同難有猶是又御禮厚申出候

極密御合に申上置候ケ條

當節御改正之御時節ニ付家政之義も夫々心配いたし家臣之者多勢之内ニは自然無據不行届之ものも有之候ニ付少々嚴重ニ申付候而中ニハ國住居申付候者も有之候右ニ付而ハ自然重役共杯を怨望いたし更ニ跡形も無之事杯申觸し事を拵外向々之振ニいたし張訴捨訴杯いたし候間更ニ取用ひも不致却而訴狀之致方等嚴敷穿鑿いたし居候事ニ候へ共未耽と不相分心配いたし居申候尤右等之面々疑惑にて捨訴張訴等致候趣意相違之事而已故實ハ不被行事と存候間左候へハ定て貴所様御家の別段之近親之事故如何様張訴捨訴杯万一可有之哉も難計左候へハ自然と小生方へ

相廻り候と見込可致哉も難計又ハ御重役共且秋田彈正杯へ如何様之手續杯にて可申聞も難計若々萬々一訴狀ハ勿論右様之事も有之候ハ、極内御直書にて小生方へ御廻し可被下候尤も貴所様御留守にも相成候ハ、彈正暫御跡ニ残り居可中間同人ハ印封ニいたし小生手許へ與廻り花井方迄差廻しニ相成候様致度存候夫々評議之上小生も得と承り取計候事故小生を彼是申候義に候ハ、素々不苦候得共却而重臣を疑惑いたし種々ニ虚説を申觸し人心を誑惑いたさせ候而ハ實に以の外と存候間不外御近親之事故内實之處御合ニ打明ケ申上置候跡ハ御火中可被成下候以上

三月四日

尙々時氣折角御厭專要奉存候乍末聞令君々も山々宜奉願候此程御咄申候小筒不遠買入候間其内御咄可申上候彈正へも宜御申通置可被下候前文之事柄故與一兵衛を以申上兼極密申上置候間彈正にも其心得よて含居候様御合置可被成下候以上

一、三月五日昨日伊勢守様を被仰進候趣委縷御承知尙又彈正へも爲相心得被置候段御内答書大奥廻りまで被進之

一、同日夕又、勢州様へ御内書左之通

然は先時貴答得御意候通り昨日縷々被仰越候云々御配意吳々致推察候仍而又申上候水府一條定而御承知可被成候昨日被仰越候貴家之云々の何方をも何も沙汰無之却而過日水府家來拙家來へ極密申聞候の今般之儀も去ル甲辰一件之同様ニ而何分高松聞込深く相成其外奸黨蜂起殊の外困難之趣且又去月廿八日登

營之節中納言殿態々逢被申右同様之趣ニ而心配被在之旨併御父子之間柄ニ聊も申分無之儀何分雙方御念被入御糺ニ不相成候半而の不相濟儀と掛念ニ被存候旨頼談有之候得共御先柄と申

公邊ニ被爲置候而も孰レ公正之御聞入ニ可相成儀故於小生も致方無之定而貴君御耳への委曲疾ニ入候事にて御取調中と存候何分彼方にての

何方か如何様之儀申出候而も篤と御吟味被下候而邪正相分り候様願の敷旨ニ相聞え申候何分當御時世彼御家等にも云々有之候而の不相濟と恐惶之事に御坐候於野生遮而周旋可仕筋ニ無之候得共中納言殿并家來申口にも不拘邪正御糺シニ相成候て相分り可申哉とも被存候右は於拙家片聞故指控居候處去月廿八日中納言殿を直話之事故昨日被仰越候儀ニ付猶又思慮いたし候處御大事之事と存候故御心得迄極密申上候何分不惡御承知御含可被下候以上

三月五日

一、三月四日橋本左内原田八郎兵衛方へ罷越内話承候趣の去月廿三日一橋殿を水黄門殿へ御忠告御書通有之云々一件ニ付大ニ御憤發相成候由其後廿八日前顯之趣同廿九日伊賀始御前へ被召御側向ニ而三人を始奸黨夫々罪狀御糺にて御用書等出來翌當月朔日奸黨十三人御國勝手或の蟄居等夫々輕重ニ應し嚴敷被仰付候由何分御斷然欣悅之趣且老公ニ御沈靜ニ被

爲入候旨將又高松侯の初之程の矢田部儀の手に前に圍置候間早速御取用ニ相成候様加程之忠臣御擯斥の御爲不可然等類ニ御勸メ有之候事之由其砌の實に彼邸に追々之運ひにて讃州へ隱匿ニも相成候はん哉と有志の面々にての勘考之由ニ

一、三月六日薩州様の御内答書左之通

尊書辱奉存候愈御清榮奉賀壽候昨日は御光駕無之殘情不少奉存候扱勢州の申遣候儀云々奉拜承候中、書中ニ而申候とも相分り候義無覺束いつれ對面あらての知兼可申候間十五日逢候節ニ様子相探り萬々可申上尤様子相分り候は、御發駕前日御取込と奉存候得共鳥渡罷出可申上しかし手紙にて相分義に候の、以書面可申上御發駕前一度の拜顔仕度奉存候其外申上度儀も有之候近日萬事可申上候頓首

三月初六

一、三月十一日水老公の被進御書并御別啓左之通

一輪奉謹啓候兎角不同之候御坐候處倍御清泰可被成御起居奉恭賀候陳は昨年願置候通近々御暇被下置候得は來ル十六日發途歸國之積り御坐候昨年來不相替每度種々之儀相伺御懇篤御垂教被成下實ニ奉感謝候何分時候折角御厭御保重貴體御安全被爲在候様乍憚奉專禱候此品輕乏奉耻入候得共折節御見舞申上候驗迄奉進呈候御笑拾脱カ可被下候右御見舞何角之御禮申上度旁草々如此御坐候謹言

三月十一日

尙々吳々不順候折角御加養專一奉存候乍憚黃門君にも宜御致聲奉希候以上

副啓得貴意候先日は御別啓細縷被仰下候條逐一拜承今更驚入候次第嘸々御心痛奉察候乍去阿閣の書中申上候條彼是不都合御坐候得共兎角黃門君の關老等へ厚被仰立候方可然と奉存候則其段黃門君迄申上置候事ニ御坐候尤黃門君ニは不一方御痛心之趣承之乍憚致感佩候且當月初彼

黨數輩轉遷擯斥等之御沙汰内、傳承竊ニ欣然罷在候事に御坐候何分にも
公邊ハ御糺ニ而正奸判然相成候様願ハ敷諸有司聞込種々相成可有之候
得共第一閣老ニ而糺明之筋ニ相成候ハ、自然黑白辨別ニ相運ヒ可申彼
奸魁有處等も相分リ讃州主張之勢も磷キ可申哉右は申上候ニも不及果
敢ク、しからの愚案ニ而可有之候得共兎角時勢斷然との參リ兼候折柄
故右ニ應シ前文之趣愚存申上試候事ニ御坐候先日來も彼是周旋仕置候
筋も有之候得共未是と確證申上候程之事も無之心配仕居候事ニ御坐候
彼是と發途相迫リ候故寸情申上候儀御坐候頓首

一、三月十三日水老公ハ御答書并御密啓左之通

瑤章披讀氣候不同之處彌御健勝令欣躍候近日御暇被仰出候得ハ御發軔
可被成ニ付御書中縷々佳品之祝德薰令感荷候此段布答草々也

三月十三

二、伸爲時御保重專一ニ候些少之國產表永好之意候不一

御別紙毎度御懇ニ被仰越候義厚忝存候扱又中納言迄縷々被仰下候よし
令多謝候畢竟同人義十三歳之時ハ廿余迄拙老教誠不相成様 公邊ハ御
仕向故奸人の教諭にて成長いたし候故近頃拙老ハ相談致候様相成候て
も動もすれハ奸説に欺かれ候故此度之様なる事も出來申義於拙老痛心
致候

一、公邊ハ御糺ニ而云々御尤ニ候ハ共左様之幕ニ候ハ、第一去ル甲辰之
節も御糺ニ而奸人共嚴重ニ相成候半故是迄ケ様之事ニハ相成申間敷候
處正の方ハ正法にて扣ヘ奸ハ本ハ奸の事故内外ハ賄賂を以頼ミ込夫の
ミならず奸僧等先手ニ使ヒ様々の計策を以致候故

幕ニてハ奸の方をのミよろしきと存候義と被存候風聞等も皆奸の方ハ
のミ聞候て片聞ニて被遊候様ニ有之候拙家正奸早く片付不申候ハハ自
然幕迄も押移リ候様相成候半と兼々心配致候諸有司聞込種々ニ可有之
云々御申聞之通りと存候處十之者に候ハ、八九ハ皆奸説の讒言浮説と

被察候奸にての不思寄根なき事を様々作り候て風聞ニ相成候様うり物
同様にて申觸し候へ共元々無之事を一々斷候て觸候事も不相成候への
有志之者聞候ての一笑致し居候處奸家々の數右様之事持出候への
幕の御役人も終ニ尤と存候様相成事と被存候此度高松にて拙老を押込
候か又の國へ下し當時有志の役人共不殘公邊を御沙汰ニ而蟄居申付奸
人を入かへ可申萬一夫も埒あき不申節の當時有志の役人を毒殺致し候
様ことの事にて側醫師十河船安といふ者か中納言へ毒藥二包一ツハ礬石
粉一ツハカを渡し奸家自分くにて毒殺致候への其罪身ニ及候と存中納言
を欺き候て是を吞セ自分くの不存顔致し候心得高松初奸人共如何
にも武士道不存者ニ候左程不宜役人にて主君の不爲と存候への幾重ニ
も中納言へ申聞不用候への打果候て自分にて切腹致候がよろしき事ニ
候處奸家の計策の皆陰にて驚入候奸計ニ候一体高松事の後見御免ニ
相成候上の以前の手づるにて奸家を取入候とも後見中の格別今の拙老

へ相談候様御達ニ相成候上の扱兼候由拂候への奸家も取付處無之候へ
共預ケニ致置候結城等と内々通し居り遣し物も致し結城の上ケ物も致
し候程にて書通のミハ度々の事顯然と存候一体溜詰の外々ニ而も御役
人と存居候程の者ニ候處預け人と音信致し居候義不相濟事ニ候今幕
か大名へ御預ニ相成候人と拙老音信等有之候への幕にて其儘ニの御指
置被遊間敷高松の連枝に候へのやはり幕か大名へ御預ニ相成候人と拙
老文通いたし品物とりやり致候も同然の事ニ候谷藤出奔致し候をも高
松ニ而町奉行へ頼ミ町同心付添候杯申事も承り及申候一体本家ニ而指
出候様申候への本家の人の事故早速召捕候て不指出候ての不相成程の
事に候近々高松へ召捕指置候やう申遣候含ニ候得共多分の不居とか申
出し申間敷哉と被察候悪しく致候は、異船杯へ移り不申候へのよろし
くと懸念致し候彼奸惡人異船へ萬一ニも移り申候への必日本の大御不
爲と存候何卒勢州にて能々吞込居候様致度候第一聞云々是の溜詰相勤

高松と懇意ニ候半故高松の方を尤と存候半難計候扱萬一一閣にての高松の方を尤と存二閣にての此方の申處を尤と存候様相成候への此方の正奸直ニ幕へ移り候義にて如何にも不容易事ニ候二閣二ツに相成候と下ニ役人迄も二ツに相成候義さし見え申候品ニ御周旋之由毎度忝存候此上之處も何分よろしく御頼申候此節の中納言ニは正ニ返り候故大ニ安心は致し候へ共高松并同人家來三四人此まゝにての又、後日再起無疑候故くれぐれ此處の心配仕候御答迄早々也

三月十三日

又御別紙にて
委曲書面ニの認兼候故安島彌次郎に成とも御聞可被下候

一、三月十三日福山侯の御内答書左之通

過日は華翰被下謹而拜讀仕候不同之氣候御坐候得共被爲揃益御安泰奉賀壽候陳は水府之義ニ付縷々蒙仰候條々委細拜承段々承込候義も有之候ニ付甚恐入候得共尙中納言殿へも不願憚申上候事共も有之候實ニ老

公御心配之事と奉察候乍不及此上共心得居候間御安心可被下候扱又阿蘭陀の持渡候小筒小生買求候内甚聊ニ候得共先ツ御廻し申上候御留置候而宜御坐候此段申上度如此御坐候早々謹言

三月十三日

二、白時氣御自愛專要奉存候乍末閨令君へも宜被仰上可被成下候奥も追々續快方ニ付乍憚御安心可被成下候何も取込早々以上

一、三月十四日福山侯の御再答左之通

華答書致拜見候如諭未不同之候御坐候得共御揃愈御佳安珍重之至御坐候陳は過日水府之儀得御意候處段々御聞込之儀も有之候條當中納言殿にも被仰入候而老公御心配も御察尙此上御配慮可被成旨實ニ安心致候然ル處昨晚老公の別紙之通被仰越候右は申迄も無之候得共其筋ニおのての正詳ニ御糺明ニ可相成儀ニ而他家之事見留も難出來儀を兎角の難申述候得共何分被入御念公正ニ御辨別願の敷故不外貴兄迄ニ有之儘入

御内見候尤御披見後御返却可被下候

一、兼而相願置候和蘭陀持渡小筒御買入之内五挺先づ御廻し被下留置候而宜旨被仰下萬謝之至御坐候兼而懇望之處御配意を以御廻し舶來之眞面目難得品ニ而不堪雀躍候全以御厚配故と吳々感謝難申盡候右一應之御禮報旁草々如此御坐候以上

三月十四日

二、仲時下不順氣尙又御加愛專祈申候昨日は

御暇被仰出難有奉存候荆婦へ御加書之趣申聞候處尙又宜敷申上度旨申出候お謚事も追々快方之由御同怡不過之候尙亦宜御添意希申候本文之一件吳々御配意願の敷事御坐候且御廻し被下候小筒早速家來共へも拜見爲致候處何珍重無限候くれぐれ御禮申上候彼是取込草々寸答御海恕可被下候以上

右御書通ニ前記水老公之御密啓添被遣候處御返報の無之即夜別紙御密書

まゝ御返却

一、三月十五日佐倉候へ御逢對ありて御假御養子の御封物を被指出たり此候は從來御懇意ありしかとも御再職後始而之御對話なれの種々打解られたる御物語共にて舊冬御建白之事も候より御申出にて閑老の定套にて御近親の外御書通無之事故御返書も無之無禮のよし御挨拶ありて猶思召付れたる御事共の無御遠慮御申聞ありたき旨杯御申ありしとぞ

一、右同日水老公へ御再答書如左

一、翰謹啓漸暖和相成候處倍御清泰奉欣賀候然は一昨日は貴答被成下御國産二品御惠贈奉拜受毎度御懇篤之至奉感謝候且又御別啓を以て細縷被仰越候條逐一奉拜承之尙更御心痛共吳々奉推察候乍不及心配仕居候則去ル十三日阿闍々來書中貴家御事實ニ心配仕居候趣共申越候故尙又申遣候儀も有之將又内々探索之處薩州之内話にも福山不外心配は致居候由ニ承及候兎角黃門君御卓然被仰立候方專一と奉存候則今朝於

營中黃門君へ拜謁猶略御模様も相窺ひ乍憚申上候義も御坐候何分阿闍も心配之趣追々亮然所仰御坐候不肖之野生或周旋ケ間敷も躡等にも可有之哉に御坐候得共日夜焦思罷在候事御坐候是と明辨申上候程之儀も無之候得共前文之趣一寸申上候十三日

御暇被仰出今朝右御禮申上候ニ付彌明後日發途何角紛多乍草々致歸國候而は自然疎濶にも相成候故申上候事ニ御坐候頓首

三月十五日

尙々時下御加愛奉專禱候此一品此節到來乍失敬呈上仕候御笑捨可被成下候以上

一前に記たる如く今茲四月御遠忌御相當によつて早御暇御願ありし故三月十三日

上使を以御暇被仰出同十五日爲御禮御登城あり同十六日江戸表御發駕にて同月廿九日御歸城なり去年は天下之御爲に種々御建言も被爲在しかと

御採用なき而已ならず福山侯さへに理屈家學者風と見なし給へる世態なる故公御慷慨に堪へさせ給はず幕府の事の爲んかたもあし自國ニおゐての將來の警戒あくての適ふへからすと此年の御在國にの大ニ明道館を開らき給い文武の道を講明して治教を弘め必戦必死を御心とし給ひ軍制を實にし武備を嚴にし演武場を一集し武術を勵し給ふ公の勵精圖治諸有司の鞅掌勤勞實に目覺しき形勢なりしか其事の諸局の記録に詳なれは爰に略して例の天下に關係せる御往復等を次々に專と記し侍りぬ

一、四月十五日飛脚發ニ付御歸國ありし御吹聴水老公へ被仰進たりし御書の御別紙如左

副啓奉得尊意候其表發途前彼是多冗乍懸念上程仕事ニ御坐候其後御模様如何御坐候哉御心痛之程奉遠察候好魁のまた御手ニ入不申哉其他正邪之分徐々判然にも相趣候勢にも相成候哉日夜御案し申上居候歸國後も御承知之通り先祖追遠祭祀等彼是繁多罷在候餘は後鴻可奉得貴意草

申縮候頓首

四月十五日

一、右同時福山侯へ御同前被仰進候御書御別啓如左

副啓發途前内密被仰下候貴邸内一條云々其後如何有之候哉日夜御案し申上候程能鎮靜に相運ひ候哉彈正を申上候様等之筋等ハ無之候哉彼是懸念仕候水府一件も追々相納り候哉是亦懸念仕居候何分尙亦御介意伏希申候百里を隔候得ハ懸念も一入ニ御坐候異船沙汰も不相聞彌穩之方と存候餘は後音可申陳彼是多事草々申縮候不盡

四月十五日

一、五月二日四月廿六日發之飛脚着福山侯右之返書ありしかと一トわたりの御答而已にて記すへき條もなけれハ略之

一、水老公ハ御返翰并御副啓御別密啓左之通

三月十二并四月十四日貴書何レも其時々拜讀仕候三月は御承知之通り

水老公ヨリ
堀田閣老へ
ノ建議ニツ
キ相談書

之義にて延引御發駕ニ指かゝり候故御歸城之上と存居候中二度貴書被下失敬之段御海恕可給候先以御道中無御恙御歸國之段十四日之貴書ニ而承知仕候爲 天下令大賀候拙老事も無異罷在候故御安心可被下候先ツハ御答并御着城御歡申旁申進候也

四月念五

御別紙趣何も承り申候事濟候義ハ文略いたし候御承知之通奸臣共も相分り申候上は父子之義ハ益熟和ニ相成候故御安心可被下候奸臣處置も今明日中杯と被存候只々連之高砂ニハこまり申候得共當節何分致し方も無之候右高砂居候中ハたとへ一度ハ奸人治り候ても拙老泉客と相成候後ハ又如何様の事仕出し候も難計候一聞ニテ糺明筋ニ相成候ハハ自然黑白可相分云々御尤ニ候得共ランベキ先生迎も左様ニハ相成間敷奸人ハ申込候をさへ取上不申候へは先ツハ宜敷と存候畢竟ハ甲辰之節も林大鳥甲等結城等并上野奸人等申合候て出來候事と存候兎角國々之

有と上下共に心得候てたへ身死昨夢紀事四（安政三年五月）攘候處を第一と致し漢學ニ資て其道を益明し洋學ニ而船炮等之器械ま

て精し皆彼ニ取て彼を禦候用ニ相成候國學を本と不立候得は何程船炮ニ功者ニ而も却而敵之資と相成候事も難計され何にも國學漢學洋學と申序次の御立被遊可然事と奉存候且公邊ニて國學の御好無之洋學のミ被遊御立候とも諸藩有志之者も有之國學を引立候は、（三字朱書）終（一）

公邊ニも御廢被遊兼自然真似を被遊候様ニも可相成哉既ニ廿年前より船炮之事拙老數十度建白迂遠之説坏と御評議候哉御取上ニも不相成候處近來船炮々々と御世話有之候への拙老先見之様ニて如何ニ候得共此末國學を本と可被遊御立勢ニも可相成哉難計奉存候への今の中御卓見ニ而國學御引立被遊候方御爲宜奉存候又國學と歌學と一物ニ無之歌學は國學之枝葉に候へ共心得違候者も可有之御選用大切ニ存候當時國學ニ而御用相勤候者の前田健介計と存候得共外ニも人有之候への御召

（原注）
下ニ附紙に
て此御人と
いふ御人役
人を指なり

出ニ相成新ニ局を御立可被遊候只今漢學之支配へ國學を被差置候様ニ而は乍憚本末を失候たとへの外科醫師之支配ニ本道醫師を被差置候類ニ候且亦洋學より被下物薄きよし左候ての馬醫之下ニ御ヒを被差置候と可申哉餘り御人なき様ニ而後世の勿論當世ニ而も識者の服従仕間敷候西洋僻之人の末を論候故洋學の急務と可存候得共前文ニ申通り國學ニ而人心を定候上の漢洋之學も用立申候義ニ候への熟と御勘辨有之國學御引立之事於拙老至願ニ候餘り存分ニ認恐入候得共何も公邊御爲宜様存候故申進候也

四月十八日（念五）

水隠士

堀田殿參（朱書）

二白乍憚

公邊御爲と存入候事故勢州初ニ御相談頼入候不盡

（一行朱書）拙老申處不理に候は、無御遠慮御教示希申候

昨夢紀事四（安政三年五月）

御充行之定

御儒者

貳百俵拾五人扶持

西洋學此度蕃書調所出來候て三段ニ學者の御宛行定まり候

上等

三拾人扶持 金五拾兩

中等

二拾人扶持 金三拾兩

下等

拾五人扶持 金貳拾兩

右之通

去ル十九日御用調中國學者前田健介へ被下候御定

十人扶持 金拾八兩

右は江川門人鐵砲打に近日被下候御手當

五人扶持 金貳拾五兩

右之通り江川門人と格別之相違も無之國學御引立之處ニハ相當不致候
へハ前文之通り堀田へ可遣申脱カと存下書認見候得共當世態一閣ランベキの

處へ申候とて通りも致し申間敷殊両林漢學ニ候へは和漢蘭之順に相成
候へハ林ハ元々和の事嫌ニ候故六ヶ敷候半一体於
御所も國學と申ハ無之日本人ハ皆國學不致候てハ不相成故畢竟ハ國學
の館ハ無之儀と存候所只今西土の學のみならず西洋の學御引立ニ相成
候上ハ國學の館無之候てハ佛學漢學蘭學等皆海外の學ニのミ相成り
本朝之學ハ益衰へ可申と存候へハ右之通り堀田迄可申遣と下書は認候
得共奸人ニて奸說申ふれ於

幕も信し候人も可有之哉當年ハ未登城をも不致程の事故先ツ〜と存
遣し申候義ハ扣へ申候處任序貴君の御存意ハ如何可有候半哉と御相談
かた〜申進候御覽後此書面御返し可被下候也

くれ〜も御存意ハ御存分御申聞ニいたし度候老眼晩景認候へハ文
字違等も可有之御推覽可給候

一、五月七日飛脚發ニ付水老公ハ被進御内答書左之通

尊答書奉捧讀候薄暑之候相成候所倍御清泰被成御起居奉拵賀候陳は先
 便得貴意候云々御答被仰下候縷々奉拜承候且又御別啓佐倉へ可被遣御
 下書爲御見被下拜誦仕候乍憚無間然至當之御建言ニ而忌諱ニ觸候と申
 儀も心付無之候間 御採用之有無は難計候得共何分被遣候方可然御儀
 と奉存候將又被仰越候通當世態六ヶ敷儀共ニ而容易ニ通り候半哉否林
 家等之意味も可有之候得共何分ニも御書面之趣仰望不雷事ニ御座候間
 早速被指越右様之御運ひニ相成候様實ニ默禱仕居候如來論外國學のみ
 ニ而國學湮滅ニ成行候ニ付而人心奮興不仕慨歎之至高示ニ依而今更
 ニ彌増憤然之事ニ御坐候何分御主張御爲可然と乍憚吳々奉企望右卒爾
 之貴答振ニも相聞可申哉ニ候得共再四熟慮仕候處實ニ御同意ニ付申上
 候事ニ御坐候不惡御承知可被下候右貴報旁如此御坐候謹言

五月七日

尙々時下梅天殊更御加愛奉專祈候次ニ小生無異罷在候間乍憚御降意可

宇和島侯
水府事件
報知

被下候

一任來示御別紙奉返上候且又本文貴答縷々は不贅候以上

一五月十日去ル三日發之飛脚着伊達遠州侯御密啓左之通

密啓申上候水府一條着府後十二日和州十五日麟兄十八日武田原田へ家
 僕遣等之密話事情左ニ大意謹述仕候條何分意表之處置妙略御密教被成
 下度奉渴望候夜白心痛ハ仕候得共愚劣之賤夫不行届儀計ニ而心痛仕候
 一川越云當節ハ御父子之間彌親睦無二磔館要政之者有志相揃義ハ近年
 來無比ニ而奸徒之處置も多分調相成首惡寅壽も自刻可被申付合之由亡
 名之矢田部大嶺兩人何分捕得不相成由〇一橋君ハ讃州之處置隱居ニは
 相成度達而存慮有之候得共老公それハ不宜讃之不屈ハ尤可惡候得共當
 公も一旦ハ煽惑疑動親父を如何と被存候罪有之讃州計云々と申事ハ
 相成間敷讚隱ニあれハ當公も其儘ニは參らす候故此儀ハ不可然と差留
 ニ相成候由 公御返答ハ御老熟之御賢慮公正之議ニも可有之哉と感服申上候得共一
 公之後患見破之御卓識ハ實ニ敬服不肖奉存候乍憚併一公と尾公と之御合力

ニ無之候而ハ讀當時之様子ニテハ隠云ハハ連も六ヶ敷可有之其因ハ麟兄密話之條ニ而御洞察可被下候是非隠迄ニ不相至候而ハ水後患ハ除去候様ニハ不相成事ハ一公之如見
 候此他密話も有之候得共緊要之條には無之候○麟兄對話之内阿閣も内實ハ老公最早御登營無之方を望み被申候様考候由先頃阿之口氣にも元來堀田ニ御不手合之處歸職後も御逢之時堀田をハ嚴敷御さめ付被成或ハ同人へ御挨拶無之儀も折々あるゆへ堀田も甚不決ニ存居いろく心痛いたし候得共面倒不絶御用部屋内へ打合不申候故不得止申上候迄ハ御控被成候様申上置候處老公之御宜敷儀も有之又迷惑之儀も有之候と被申候由阿口氣も据りなき説話に存申候當公も中々油断不出來御方ニ而自分と申上さる事を御取締ニ而老公へ被仰上候故老公も御疑惑被成候而自分共へ御尋被成候事折々有之先頃も餘り之事有之候故同列申合候而當公へ御心付申上候儀も御坐候此話も不可何にしても辰年又此度と度々元藩中不静謐ハ御家事御不取締と申ものにて候得は大政之御相談此一言よて御登營を不欲念ハ明白いたし候不取締
 抔も如何に存候旨此一言よて御登營を不欲念ハ明白いたし候不取締 ○奥御右

筆之口氣ニ而ハ老公御夫婦を極能き御機嫌ニ而水府へ御移シ申上度との注文出居候由右之都合候得は最早迎も御登營あるましくと存候旨此説甚以不容易一大事ニ御坐候尙薩兄ニても極密相談仕心痛居候堀田ト讀井伊之存立ニ而其根本水奸人之運策ニ可有之實ニ決着にも至候而ハ又一七事起リ可申候阿閣と讀ト合ハ隨分宜敷旨麟兄登營之節見受候も讀密話之席へ井ト參リ三人密談之處見懸候由右之御考よても三人之奸謀ハ明白ニ老公御始水藩有志へ此事申渡候得共もし防遏之處置ニ狼狽此密議漏れいたし候而ハ彌以大切ニ至候間いまた吐露不仕候其段ハ御心得被下度幕議之様子聞探候上水へも極密發露仕へ候 ○十七日武田原田兩人へ一席にて家來吉見左膳及密話候處二月望日讚州讒言カ十河船庵揚屋入抔之義ハ委曲承知と奉存候間不申上候兎角讚州奸首と愚考仕候間此人之奸謀證據を得候儀緊要ニ付其義爲尋候處結城へ之文通一兩通取押有之趣相話候事
 ○矢田部大嶺之兩奸讃國へ潛匿かと申説有之候ニ付兩公より御頼ニて當時探索中ニ御坐候捕得候得ハ無此上折角心痛仕申候慨畧右之通御坐候間密奏仕候謹言

四月廿五日

一、五月十五日飛脚發ニ付福山侯へ御内書左之通

然は當春御内密被仰越候貴邸内云々一條愈靜肅相成候哉其後彈正方も何とも不申越候故定而御取締出來之儀との存候得共時々懸念仕候故竊ニ相伺申候且又先鴻彈正か密々申越致承知候得の水府一條兼而御配意有之故と被存奸魁夫々御處置相成候由竊ニ欣抃申候全以段々之御周旋故と存候講武場も愈御開發ニ相成先頃の

御立寄も被爲在其後追々盛行之由承及之乍憚御時勢御相當之御儀と難有諸國へも相響き候御獎勵と奉存候右ニ付而も水老公への先年被仰出も有之儀愈以此節も御登營有之御相談之趣ニ相聞え候の天下有志之族も愈相進ミ可申事と存候處當春來御登營無之等之風聞にて候得の何とか意氣込も薄き人心ニ成行候而の誠ニ以御大事至極ニ御坐候定而幕廷ニ而委縷之御譯合の有之儀と致推察候得共何分ニも今度水府ニ而奸黨御處置之事追々相聞別而一入天下之有志眼目も注き候折柄ニ

候得は此節水府御家ニ付事立候儀の無御坐様仕度もの歎と奉存候申迄も無之候得共水府ニも不限御三家之儀の御親藩ニ而諸侯との格別之義御一家内同様ニ而御三家ニ御過チ有之候得は則乍恐

公邊之御瑕瑾と奉存候且乍憚當時の御三家共ニ御年若且御相續等ニ而別而自然人望老公ニ歸し有之實ニ御大事之儀と奉存候萬一御非義も御坐候の如何様ニも御篤諭有之専ら御登城御相談等無之候而は御形計りも不相濟哉とも奉存候近年兩度之被仰出を御立被遊候方可然と奉存候近ク申候得は歸國以來弊藩之人心相考候而も少有志之向は何も前文之趣ニ有之候間諸國も推而可知事ニ候昨年來も御内話も致承知候儀且當春は毎々水當公へ御忠告有之候條等も承知ニ而前文之邊は申迄も無之候得共今般之儀承知ニ付而も尙更御大事と奉存候例之愚存申陳候尤万々御拜配中ニ而可有之ニ右様あたらしく得御意候義定て贅言と御聞取も可有之候得共退而沈思候ニ少々

幕議ニ被觸候御儀も有之候ハ、徐ニ御辨解御忠諭ニ而何分ニも彼老君
 爲天下御維持有之候様ニ願ハ敷奉存候右之處御周旋振リ甚御六ヶ敷儀
 ニハ可有之候得共老公御進退之儀も貴兄御一心に歸し有之趣ニ天下舉
 而倚賴致居候儀ニ候得ハ此節別而御配意萬々ト奉存候此邊純熟ニ相成
 候得ハ御裨益無量ト奉企望候右等理屈ケ間敷御聽取可被成歟ニハ候得
 共何分ニも天下之人心歸熟仕候儀何カも相勝レ候御爲筋を反覆存付候
 故愚意不殘及吐露候萬一御配意之一助ニ相成候得ハ實ニ本意ニ候敵藩
 等も人心之歸着之處甚致心配居候事ニ御坐候就而も前件之次第甚以御
 案事申上候儀ニ御坐候右申陳度時候御見舞旁草々如此御座候不具

五月十五日

一、同日水老公へ御内書左之通

一、翰謹啓仕候薄暑之節御坐候處倍御壯健可被成御起居奉恭賀候然ハ先
 日貴答被仰下候節御内諭之通其後も彼奸黨數輩夫々御處置御坐候旨竊

ニ承知仕先以聊御安心之御儀ト奉存候乍併右ニ付而も種々之說密々傳
 聞眞僞辨兼候得共潜ニ心痛罷在候何分當時態愈以御沈黙御肅然被爲入
 候方可然奉存候就而ハ過日再答申上候佐倉へ被遣候御建言御書面も其
 節ハ實ニ威佩御同意ニ付乍憚疾被指越可然ト申上候處前文之趣ニ而右
 等之儀も御採用無覺束其上色々風說承り候ニ付而も愈奸說被行候事ト
 遠察仕候間先ツ當分ハ御扣置之方可然哉ニ奉存候右様反覆之儀申上恐
 入候得共御正論も此節却而御裨益無之のミならず奸說之種ニも相成候
 而ハ御大切至極ト愚意存付候事ニ御坐候何分ニも當節成丈ケ御肅靜之
 方可然ト奉存候右等萬々御承知之事ニ可有之候得共存付候儀不申上候
 も如何ニ付得貴意候尙亦御良考願ハ敷奉存候右愚衷申上度草々如此御
 坐候謹言

五月十五日

一、五月十五日飛脚發ニ付伊達遠州侯ハ御返翰要文左之通

薩兄御對話之節阿閣之口氣老公を厭ひ或は櫻閣之不服或は御家事御取
締御大政之御相談の如何或は内史の注文老公御夫婦水府へ御移し申
上度等の件も何も

廟堂之安危に致關係候儀共にて御楮上拜閱駭然之至御坐候一々不容易
事件ながら就中水府へ御移住之一儀の至大至重之難題と存候賢兄之御
苦心御察申候拙生天涯隔地如何とも難致に付熟慮默思致候處姦兇之浸
潤寝々行はれ候大勢を挽回するの任に當るべきは薩之外は有之間敷又
薩をして此任に當らしむるの任は賢兄之外は無之候阿閣初當今平時
之處置に於てこそ老公を忌憚候得其實に天下之一大事と相成候時の積
德重望萬人之具瞻老公之右に出る者無之候への阿閣初之依頼も亦老公
之外は無之儀已に先年墨船初而波來夷情難測人心必戰を期候節阿閣
初老公へ依附致候に而も炳然たる事にて候又薩の薩たる外藩之豪雄富
強無比加之謀慮深遠天下之疑懼する處にて阿閣初之畏憚も此人に決し

申候此時に當つて老公の都を御離れ薩の幕の外戚として威望を逞ふ
せんへの薩閣と謀を合せ老公を移すの嫌疑薩におゐて通るゝ處無之候
竊に謂薩之説の閣も拒み難キ勢ひ有之候得は薩實に天下之御爲を存詰
候は、幕府を初奉り閣老諸有司に至るまで老公を信任重用有之様説得
周旋可有之儀と存候乍併老公之建議におひても弊害なき事能はさるの
委曲有之幕議も御委任の難被成次第も有之候へ、不及是非事共不本意
ながら外形計なりとも昨年來之通り時々御登營も有之御相談之御振
合に相成有之候へ、先ツ天下有志之失望丈々の彌縫出來可申候左候得
は何となく都府之鎮定も堅固に而薩之嫌疑を蒙候も半を減し可申候得
は特り天下之爲のみならず又薩におゐても避遁すへからさる重事と有
之候何分愚見の如此に候への此邊猶又御教演薩兄を御説得にて將に墜
んとするを千仞に救ふの強有力の偏に賢兄一片之誠赤を仰望するの外
は無之候

五月十五日

一、五月十六日去ル九日江戸表出立之飛脚到着水老公之御副啓如左
 内密結城寅壽初大奸之分の去ル廿五日夫々處置相成其他の悉く見捨申
 候然ル處御承知も御坐候半谷田部藤七郎大嶺庄藏と申者高松にて相應
 に遣し物致し置候と申事候得共又如何様事にて貴國へ參候事も有之候
 の御召捕置にて御沙汰可被下候若人相書御承知も被成置度候の御
 臣原田兵介杯申有志へ御内々貴臣之中之有志を御聞セ置に致度候御火
 中

一、右同時宇和島侯の御内書之内拔萃如左

水藩首惡の多分高松に潜匿と被成御考候旨折角左様存候從而黃門殿御
 頼も御坐候間相尋居候いまた遠路故不相分浪華鎮撫土屋へも御頼可然
 申上是も疾く下手故周旋と存候火急に尋候而の却而不相分歟と奉存候
 結城始の去月廿五六日裁許に相成候罪付の密示相成筈いまた不參候武

伊密話にての最前之考も至極一藩折合宜敷旨御坐候當今僕か懸念の
 讃岐か窮鼠之勢奸計當公へ委曲吐露し當公御改悟にて老公初有志へ願末御話相成
 候故奸黨皆以 露いたし讀も甚薄氷寒心之處先傾申上候通展へと
 可込ミ船閣へ頼腰押いたし井伊加談よて當公を難如クあしさまに
 申居候間阿閣もかゝり居られ候間諷諭とハ念々にハ不參候勢之事 故 兩公始彌増御

一和御謹慎第一と奉存候老公御様子に依然たるへきかと御察之由如其
 御坐候尤此間申上候老公水府へ云々の尙探候へは御用部屋を出候儀に
 の無之讃か工ミて當公へ申進め當公を一橋君へ密話御漏泄らしく此義
 の聊降心仕候尙當公之心術實の御動搖を起候事にて是にの辰閣も憂患
 之趣にて辰が當公へ内々訓戒有之哉に御聞被成候由丁度御同様之密話
 麟兄へも僕へも御坐候根元患所の畢竟の是を起候哉と存候當公の當朔
 端午之御逢にも阿閣かくらくするにのこまると御話有之故阿閣の如
 何様くら付候而も兩公御間柄一毛一厘も御間隙不被爲在御親睦被爲在
 候への山か川に變候とも奸謀の不被行譯故此處乍憚御緊要に奉存候と
 申上候處其所の御安心被成度父子共聊無隔意萬事相談致候儀に候との

御返答故さ様にさへ候得の阿閣のくら付も追々相止可申と申上置候扱
阿閣へも麟兄を先ニ密話有之様いたし其口氣承候末愚僕弁論可仕と存
居候御縁組云々之かとにて麟兄の晝後之逢整候由ニ付十分緩話も出来
候故委曲可相分と奉存居候云々

一、六月十二日去ル五日江戸表出立之飛脚着水老公の御書翰御別紙如左
俄之暑貴邦の如何候哉無御障大賀ニ候過日貴翰被贈候處尙又御再考之
趣被仰下御懇篤之義辱存候右報萬々草々也

五月念八當賀

別紙五月七日付にて別紙之趣御相談申進候處御同意にて林杯之意味の
有之候共早速申遣候方可然云々御申聞有之處當世態殊ニ拙家奸人の
幕へ手入等有之哉にて御政事海防御軍制之事迄被仰付居候身分にて當
年の一度も登營も不致程之事故右等之事心付候て申遣とても御用ニ
の相成間敷との存候故畢竟の貴兄へも極密御相談申候處云々被仰越候

故尙又考候處貴兄とても可指出と有之上の不出置候ての御相談申候
せんも無之萬一指出候て不宜候にて又々如何様ニ被仰付候共天下之御
爲と存候義不申も如何と存候故念五ニ認念六御城付の指出候處昨念七
ニ又々貴書被下先ニ云々被仰越候へ共云々の模様故扣候方可然との御
書ニ候へ共もはや指出候事故無已候今念八迄何等之事も不申來候勿論ランベキの一カ
ク杯之存意ニの甚相違と存候得とも何も

公邊之御爲と存候事故申遣候義にて閣之心ニ不叶候て不用迄にて相濟
可申候此度之義の遣し候故くれぐれも無已候へ共段々御教示之趣も御
懇之儀忝候への此後の何分不申遣様可致存候

序ニ申候閣の近縁ニ候への格別左も無之候への他人との出會不申かに
覺申候處近頃連枝高松の頼にて一閣互ニ出會有之よし如何様之縁有之候か遠縁ハ不知
近縁有之事は覺不申候又々拙家奸人奸僧杯の高松へ持込是の一閣相談等にて奸人引
出し候事杯無之様致度事に候

去月念六日方水戸山寺住日華といふ者法華惡僧也江戸へ出候よしにて長持等迄水戸城下へ出し候處念五ニ奸人夫々處置ニ相成候への俄ニ江戸登りを止山の方へ引込候よしかゝり無之候て何も山寺然る處又々此節出府之模様も有之よし長持杯の一掉ニも無之よし多分の出府之上夫々要路へ之進物等にて奸説を入候事ニ可有之哉との沙汰ニも聞及候別て一向法華ハ我意つよく國家之不爲に相成ニハこまり申候夫と申もバクにて賄賂行れ候故右様之者も取入相成事とくれくれ大息致し申候バクにてさへ無構候への何レの國も一方の治めよろしくと存候賄賂ニてハ兎角正論ハ本々正論故賄賂等ハ不遣奸人ハ非を理ニ頼候事故賄賂をも遣し候へハ兎角邪の方へのかたむき勝ニ相成候ニ指支申候ケ様の風に相成候もはや 徳天七ツ過之景氣故とくれくれ恐入事ニ候御覽後直ニ御火中

○先ニ入御覽候下書少々直し候故又々爲念入貴覽候手元ニ扣無之

候故御覽後又々御返し可給候

右御別紙櫻閣へ被遣候御下書前記有之故今度爲遣しの通り朱書入候

事前顯可見合

一、六月十四日飛脚發に付水老公に御返翰并御密答書左之通

華翰奉捧讀候如高諭俄之暑相成候處先以愈御清勝被成御起居奉欣賀候然ハ先日愚考之趣申上候處御謝辭被仰下却而恐縮之至奉存候右再報申上度如斯御坐候謹言

六月十四日

追而錦地も梅雨後俄ニ大暑相成候由殊更御加養專一奉存候當方も同様ニ而當節實ニ鏢金之熱消兼候事ニ御坐候次ニ野生無異罷在候乍憚御降意可被成下候以上

御別紙拜見仕候五月七日付ニ而御別紙之趣被仰下其節ハ御同意ニ而御答申上候處其後復思再案之愚考又々申上候條廿七日相達候得共己ニ廿

五日彼方被遣候由段々之御次第細縷被仰越逐一奉拜承候何分素意の御同然候得共時勢如何と案思候愚存丈々申上候儀ニ而右指出候とも如尊示彼方ニ而不用迄ニ而相濟候半哉ニ奉存候

一、高松一閣出會之條委細被仰下拜承是亦不審之事ニ御坐候何分可恐時態御坐候乍憚吳々も御豫防奉專祈候

一、去月廿六日水戸山寺僧日華坊出府催し之處廿五日夫々御處置ニ付指扣又其後出府之條委曲御内示拜承左様之者ニ而も賄賂次第ニ而奸計も行はれ候と申儀ハ扱々歎々敷時態ニ御坐候段々と細縷被仰下候趣拜承ニ付ても御苦心共乍憚奉遠察候其後之御模様如何と乍不及日夜懸念仕居候儀ニ御坐候

一、先日之御下書御直し之所も御坐候故又復御廻し被下御入念之御儀難有拜見則任來論奉返上候御落手可被下候他可得貴意條無之故草々貴酬如此御坐候頓首

六月十四日

一、七月四日去月廿七日江戸表出立之飛脚到着水老公御返翰并御密啓如左

水老公ヨリ
返翰好出當
公ヲ毒殺セ
ントスルモ
フアルナ云

華墨拜讀如諭盛暑候處無御恙大賀々々爲尋問貴邦美魚御投惠令多謝候
龜品報好意候也

六月念三

内密御咄申候義ニ付又々被仰越何も承知致候過日之下書もたしかに落手いたし候事濟候義故文略仕候

一、四月念五結城初夫々申付候へ共惡をにくむの甚しきの亂云々の語も有之候故極惡の格別其黨類ハ相成たけ軽く申付候處中ニ見けしに致候者も多々有之候ハ是迄之舊惡を改めさせん爲に候所四月念五後高松屋敷中ハ拙老父子不和拙老ニ中納言を毒殺致し候との義觸れ出し候由ニて右屋敷中ハ勿論他所迄も沙汰ニ及ひ遠國迄も右之義傳承之よし

尤夫の實事なき事故不苦候得共右様の沙汰を觸弘め置候て其後五月十三十四十六と三度中納言へカタンタリスの水にて飯をたき進候故中納言にても臭く食し兼候て拙老方の食を用ひ候處右カタンタリス飯の逆も食し申間敷奸にて申合候哉廿九日には礬石丸を中納言にて食し候茄子の中へ入遣し候處齒へ當り出候て衆醫へ爲見候處無相違礬石の末をのりにて丸候品に有之驚入申候全ク拙老にて中納言を毒殺致し候と申義觸置候て夫に符合致候様の奸計と相見え申候處其後の拙老飯へも礬石之粉を交候て進め申候是は拙老方の者にて改候節見付候故勿論食ひ不致候是の拙老にて中納言を毒殺いたし候と觸廻し候への少く付合不致候へ共奸人等窮策に迷ひ最早中納言にて心付候上のむだと存拙老へ中納言にて毒を用候杯と又觸廻し候策にも可有之哉尤親を毒殺致し候と申に相成候への中納言只の不符力相濟候得への中納言を落候爲の奸計にも可有之哉水戸山寺法華坊の日華といふ奸僧杯の五月念五蟄居杯申付候人の所へも行或の一宿等いた

し候由故如何之奸計を廻し候も難計候此節内には吟味いたし居候へ共未たしかと相分り兼申候何レ臺所と奥膳所にかの奸人に付居候人可有之所謀主は何レ外に有之事と存候其他品を色々と拙老の事惡様を申觸候よし承り候へ共全くの拙老不徳故に候へ共其惡しき者には惡まれんと孔子も申候への善人にも惡人にも譽られ候様にはさて六ヶ敷事と存候前文之通りには候へ共只今の表奥有志之者共にて拙老并中納言食事を初心を盡し申候への一切御案し被成間敷候其中には奸人も尻尾が出候半其尾をとらへ候へは謀主迄も可相分と存候○拙老愚考への前廣より沙汰致し置候て中納言にて疑心いたし候様仕向置毒出候への必疑心發し万々一奸人の四月念五夫に申付候處今以ヶ様の事の如何若哉有志の人にて致候事には無之哉と存奸人へ懸候への奸人共其尾へ取付有志之者にて云々致候とて有志之者を打落し奸人共青雲可致若毒かき過候て万々一にも中納言死候への拙老か殺候にいたし拙老并有志を云

可致との淺き計策と相見え申候所右様之事を奸人等致し候故中納言にての尙更奸人の惡業をにくミ父子の方の別而一和と相成り今の前文毒を進め候者を可見出と中納言にても張込居申候何卒右仕業をして謀主の者迄一々早く相分り候やういたし度事ニ付先ニ申進候家來谷田部藤七郎等之義ニ付家來若年寄太田誠左衛門と申者を高松屋敷へ使に遣し右人高松ニ居候ハ、早速指出候様申聞候所高松家老にてハ一向不存是は不存筈にて高松の家來瀧川内膳田中七郎秋山平藏杯申斷人と申合セ内々高松家へ預ケ置候よし右誠左衛門は八ッ時頃右屋敷へ参り候處七ッ半過迄待せ置候て挨拶出来不申此方より挨拶可致との事にて追て右家老來り右様の入高松への参り不申若参り候ハ、指出可申との挨拶ニ候扱沙汰ニは高松家老大久保要といふ者本家にて尋候人を連枝にてかこまる居候てハ不宣候故云々申高松國へ申遣候かにて今ハ城下近くの家ニも居れ不申城内へ入かくし居候か又は何レへ遣候哉不相分との事ニ候若く貴邦杯へ來り候は御召捕置ニ致度候前文毒殺云々杯格別之事致事にて全く高松にて三し候も何レ此者杯かとも被存候是も早く見出し度者ニ候事にて全く高松にて三四人の奸人と申合高松國へかこまる候様子ニ候何も御覽後直に御火中ニ致度候毒藥云々等他へ聞候ても外聞不宣候得共任御懇意極密御咄申候也

一、梵鐘之事杯も日本御警衛之爲之義にて重き

叙慮の出候事も出家方云々申候への立消ニ相成候様にてハ迎も天下の事は六ヶ敷と存候夫も(目)等が働候事かと存候直ニ御火中

一、七月九日飛脚發ニ付水老公御再報左之通

尊答書奉拜讀候殘暑尙酷烈御坐候處愈御壯健被成御起居奉賀候然ハ先日國産枯魚奉呈候處御謝辭却痛之至奉存候將又佳品御投惠被成下拜受別而嗜好品故不打置拜賞奉萬謝候毎々御懇篤吳々奉叩謝候右御禮再報如斯御坐候謹言

七月九日

再伸殘暑兎角甚敷候貴境も同候とも被存候折角御加養專一奉存候頓首

一、御密答左之通

御別紙御密啓拜見仕候毒殺云々之奸計扱々驚入候次第如來諭奸人尻尾か出候而御とらへニ相成候様默禱仕居候

一、谷田部藤七郎云、委細被仰越逐一拜承之是亦以の外之儀彼藩と同意之奸之所業來示之通りと奉存候若く弊國等へ参り候は、召捕候様被仰下拜承仕候先日來追々消滅之方ニ赴候半歟と存居候處意外之事共彌増御心配共奉遠察候右ニ付而も

幕邊奸説行はれ候半哉も難計何分にも乍憚御肅靜より外無之哉ニ奉存候乍不及先日も福山へ内書遣し申越候事も有之正奸分明相祈居申候

一、梵鐘之事も立消らしく恐入候事共御坐候何國も同じく黃白先生の働次第との可歎之至ニ御坐候前文毒云々之事の秘中の秘尊書拜見後直ニ

丙丁ニ附し申候態と委曲の不及貴答候恐く不具拜

七月十一日
一、七月四日立江戸の飛脚着伊達遠江守殿の御内啓左之通

極密申上候水府光景依然中先日少く宛傳聞之義有之候處多源の義奸説申觸シ候哉又の當春十河船庵之事を誤聞致候事と存居候處昨日當公へ緩々拜眉仕候處實事にて甚朝暮御飲食ニ御心痛御當惑之由御密話有

字和島侯ヨ
リ水府内乱
ノ件ニツキ
内啓

之候大意左之通御坐候御應接之略申上候

一、五月中旬三度當公へ進毒藥ヨセキ之由 老公へ一度御前ニ右ニ付女中共多人數揚屋入ニ相成御吟味最中ニ候處首惡之者出不申甚御不安心御當惑被成候由何ぞ愚考又世評も承候の、申上候様被仰聞切々驚入候次第深宮中迄如右との實ニ危御義不容易次第痛歎之極奉存候徹底御吟味被相竭除根誅首惡之御處置無御坐候而の不相濟片時も御安心不相成儀との奉存候得共何分にも深宮且御腋下之儀候故愚劣僕存付の無御坐候兎角衆婦人中首惡可有之其婦女を使ひ候元惡必極奸男子可有御坐候ニ付兩明公御始英明之御洞察御吟味にて御見被爲在度進毒發露にても老公への當公云々と御疑セ申上當公への老公云々と御疑ひ相生し候様可申上儀ニ奉存候惡計不被行とも御離間可申上猾姦之密計と奉存上候先々御高運に御通れニ相成候段の重疊之恭悅奉存候得共逆罪人不相分内の片時も御油斷不相成御大切ニ御用心被爲在度旨申上置候扱々御同情驚

愕痛歎之極御坐候五月廿五日之裁許にて好は屈伏可致處右様腋下不測之大患ニ可相至危害之段實ニ不可解事共にて乍憚亂家之極と奉存候根深之首惡結城輩の云々相成候ても谷田部大嶺匿在故如右之患憂相生候儀ニ可有之此兩人在世ニ而ハ一日も兩公御安心は不相成如何とかいたし捕得有之様仕度ものニ御坐候而公すら如右候得は武田始之身の上も扱々岌々乎危哉と奉存候一向事情も不相分儀申上候段ハ未熟ニ候得共不取敢密奏仕候條尙御賢考被下度老公も當今無比英明主にて候處何故かよふに御困難被成候哉實ニ恐入晝夜懸念之餘り心痛難堪候故近日辰閣への極密申述得内慮度存居申候近鴻尙又可申上候長大息嗚呼謹言

七月初二

二伸尾公ハ老公へ右之風説御傳聞にて御心痛と申參候由ニ候得ハ薄々ハ賢兄御密聞ハ御坐候半と奉存候以上

隱候ヨリ密

一、七月廿日去ル十三日立飛脚着薩州様ハ御密啓左之通

啓水府内乱ノ件并ニ一橋卿廢中件

別啓仕候扱例之御一條御養女熟談之届差出申候未タ御沙汰ハ無之候得共七日夕願濟ニ可相成旨今日辰ハ申來候追々御手續ニ可相成と奉存候右ニ付倉橋事厚く世話ニ預り忝全く

貴所様御周旋故と厚辱奉存候御序之節宜敷奉希候實に萬事差圖有之甚々都合宜敷大仕合ニ御坐候吳々奉萬謝候

一水府之儀先ツ治候得共又々而公御食之内ハ如何之事有之由此程朔日登城之砌ニ當公ハも御直ニ相伺候何分未タ好物相殘候事と被存候且また辰ハも去月罷越候節口氣も承候處閣中も不承知之様子只今之通りニ而は御登營之事六ヶ敷奉存候全く當公之御心底御治定ニ相成候而其上ならでは安心之場ニハ相成間敷哉と奉存候老公も御議論無之先々當世に御従ひ之上ニ而寛大之御處置不被爲在候而は十分平和無覺束奉存候何分三家之御方色々混雜候而は第一天下之御爲不可然義尾公ハも能く被仰上候而此節は尾公御口入ニ而御登營之義有之候様致度左候而水

府御國政も當公は十分御讓之姿に被遊候而程能御教諭被爲在候而當公之御心中老公は眞實御從ひに相成候様無之候而は十分には治申間敷哉と乍憚愚考仕候吳も厚く御勘考專一奉存候

一、橋刑部卿殿御簾中之儀去ル十六日御自害可被成處漸々取留に相成候由夫が只今も御不快之姿に相成居候風聞に而は刑部卿殿徳慎院殿之事并老女之事惡事有之段御書置有之よし承申候夫に付いつれ京の御歸に可相成哉未タ委敷様子は相分不申候右も矢張水府之御續旁に而御本丸評判何かに付而不宜様子兼而西丸之事も右様之事御坐候而は甚タハケしき事かと奉存候

一、老公之事此節大奥向評判に而は線姫君と如何之儀被爲在候而當公御立腹に而姫君へ御對面無之其夜之老女御中らふも引入に相成候との事申觸らし候由實は前文御食事之事に而其節之女中引入居候よし夫々之事取交申候に相違無之候へ共たとへ風評に而も右様之義申候は全當時

老公之事惡様ニ申度もの有之申ふらさせ候事かと被存候

一、讚州之事辰へ申見候得は格別工ミも有之間しく第一當公不宜色々と御心底變り候故之義此節御心付に相成候て讚州の惡事ぬり付之思召之様ニ存候趣之口氣に御坐候實は其譯も可有之候得共讚州の余程よく申含メ有之哉ニ存候間是亦能く御勘考專一と奉存候只今之儘に而は又々色々之事起り候に相違無之と奉存候小子は表は老公之事時々あしく申居候而諸人之口氣相さくり候考に御座候辰へ申候節も少く惡様ニ申候て相さくり候義も有之候間殊に寄り水府の小子之義如何に相聞候も難計候間此段は貴君の兼而申上置候御含置可被下候

一、兼而御存し候哉川路方の居候水府浪人宮崎事當時日下部伊三次右は國許出之者之忤に而兼而願望有之よしに而水府も御承知に而此節小子方の召抱申候是は只御はなしに申上候

一、伊達へ過日被仰遣候御手傳之儀辰へ承候處是は急度御沙汰は無之と

の事ニ御坐候先は要用迄早々申上御亂筆御仁免可被下候猶後便可申上候頓首

七月五日

猶々御用大船廿四間之方去ル廿九日品川に着船廿間之方横濱迄参り當時普請取掛罷在候先少々安心仕候色々取込亂筆吳々御高免奉希候已上

一、右之御書中に一橋公の御事の公も大ニ驚き憂ひ給ひ事實なるべくと思召さねと猶橋邸の内状を御探あられんとて御實母之青松院の方へ仰越されしに爾後さし上られし御請文如左

一、御内々仰いたゞき候一はしの事いさる伺
六月廿四日廿八日か御登城之節 刑部卿様へ御對面のセつ御簾中様御容體の事御咄御坐候由右の折々御さし込御氣絶にてよほとの間御ふさき遊し度々御吐氣にて御上り物も納り不申御心配被遊候よし御咄し中納言様御歸殿にて伺

一橋卿簾中
ノ件ニツキ
實母青松院
ヨリノ返書

早速御年寄より御文にて御見舞出
其後日々御様子聞せられ御文出
へとも委敷御様子は知れかね
もはや追々御快
にて日々の御様子御聞かせられは御斷り遊し候よし申し参
こな
た御やかたへ三味せん稽古に上り候八重路と申ものもはや六十才餘是
の慈徳院様ニ三味せんにて勤候者に御さ候只今に一橋へも上り候者ゆ
へ内々にて御様たいの事承り候へに至つて御嫉妬ふかき御氣性にて刑
部卿様へ徳信院様御うたい御好にておおしへ被遊候とやら御謠本を御
持被遊譯を御伺ひ遊しとやら申事まつ徳信院様に御親様に相成候ゆ
へ御いんきんに遊し候のを御立腹にて其坐にて直に御聲を御はつし
刑部卿様を御こつき御立腹あらせられし故御迷惑にも思召候半御表へ
被爲入候との御事度々 徳信院様との外御心配遊し左様に御表へ被爲
入候てのあし、と御世話あそはし候よしやなく御れん中々との
の外御評判あしくと内々申聞
御密通など、申事御さ候や内の

者ならてはしれかね申候よもやさやうの事もなくと存候へとも御年もかくへつ違不申ゆへ世間にて左様の御噂かと致候と存候御殿内の事さへ間違候まゝ外にてはしれかね申候又何そ承り候事も御さ候の御内々申上候中略さていかな御籬中右實正に御さ候殿様の始終恐入申候左様の御方様江戸へ被爲入候の京の外聞あしくと存候京に御歸りに相成候ても御よろしくなから御時節柄と申御歸しも御物入とさやふにも相成候ましくと存候御尋あらせられ候ゆへ聞及候まゝ申上候御受まで申上候已上

葉月十六日

青松院

宇和島侯へも同じ御事に被仰遣たりし御返書の末に記之

一、七月廿三日飛脚發付福山侯へ御書被進御副答如左
副啓内密得御意候然者水府一條彼是之取沙汰有之趣風説仄聞申候先達而も申上候通り何分御三家等にて右様之義有之候而の實は御瑕瑾恐入

候義ニ御坐候尤此節専ら御配慮萬々と致遠察候事共に御さ候何卒御周旋被配意にて程能鎮靜相成候得は天下之大幸と存候遠境にて委細之事情承知不致唯々日夜縣念のミ罷在候乍憚尙又賢考御配慮にて正好判然萬祈之事に御坐候定而委曲も可有之何分御配意願は敷奉存候右例之贅言と可被思召歟に候得共幸便一寸得御意候不盡

七月廿三日

一、九月五日去月廿八日立飛脚着宇和島侯御返翰之内

老龍公線君と密接云々麟兄の御傳聞の由虚説との御遠察御坐候得共萬一虚を實とする勢に相成當今天下依頼之老公嚴咎相成候而の有志爲之に屈するに可相至哉と御憂痛御尤千萬御同情に御坐候先鴻右之義の粗申上候様奉存候僕も傳聞仕候間極密探索仕候所水好之策に御坐候虚説無相違候間速に阿閣へ吹込置候間何事も爲之御沙汰杯の無之儀と奉存候且橋公閨君先頃自盡せんとの一様賢兄嫂君と橋公云々起候事と而嫂

宇和島侯ヨ
リ水橋卿
門醜聲ニツ
返書

君御容姿橋公聞君とは霄壤に被爲在候故何かも爲御亡兄様御心痛云々
右ハ先達而傳聞仕候當龍公御密話も候き御心痛至極御尤奉存候難言儀
もなきにもあるへからざるにや乍然橋聞君之御處置ハ甚不宜段申迄も
無之候全躰無御間隔御坐候處與風此騒きに相成候義ハ離間之策を施候
悪婦人御坐候半橋公にも汚各を付西城云々の邪魔いたし候密謀かも不
相知と憂痛無量奉存候當時ハ先々爲差傳聞も不仕候兎角龍公始諸公子
之汚名を付たく存候者朝野に多く有之候には當惑心配仕候下略

八月廿一日

昨夢紀事第四卷終

大正九年十一月二十日印刷
大正九年十一月二十五日發行

昨夢紀事第一
（非賣品）

不許
複製

侯爵 松平家藏版

福井市城町

東京市四谷區舟町二十一番地
日本史籍協會代表者

發行兼印刷者 早川純三郎

316
157

終

